

# 栗栖野瓦窯跡発掘調査概報

平成4年度

京 都 市 文 化 観 光 局

## 『栗栖野瓦窯跡調査概報 平成4年度』正誤表

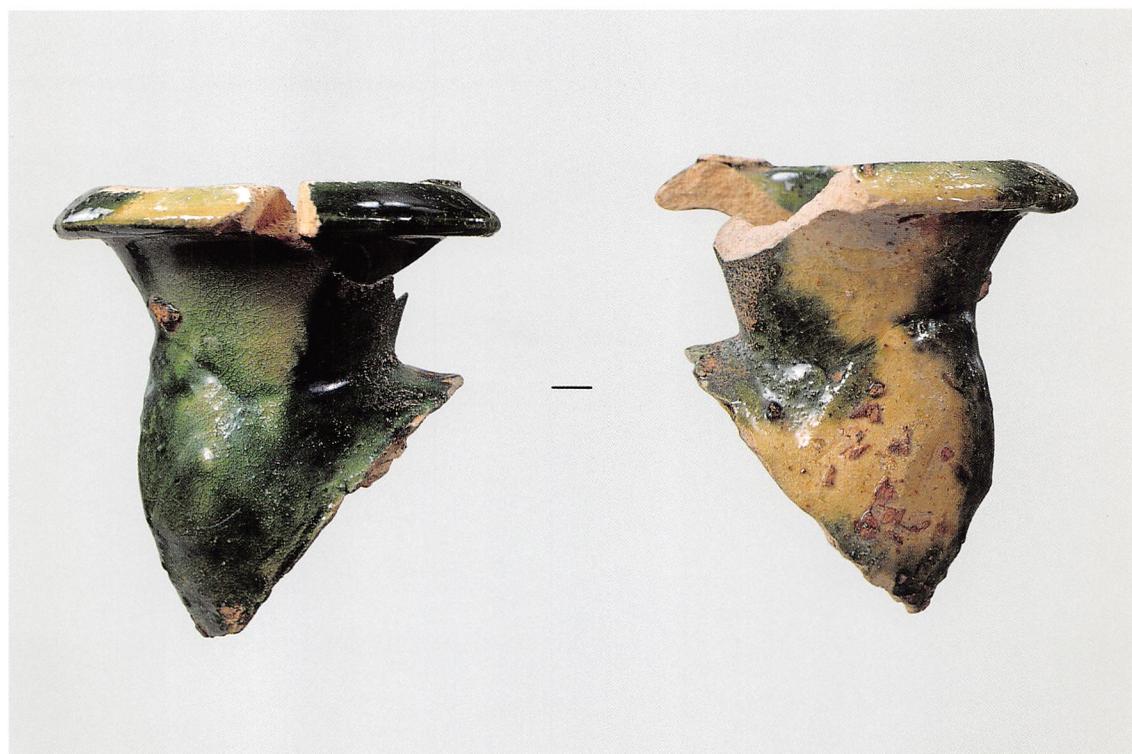
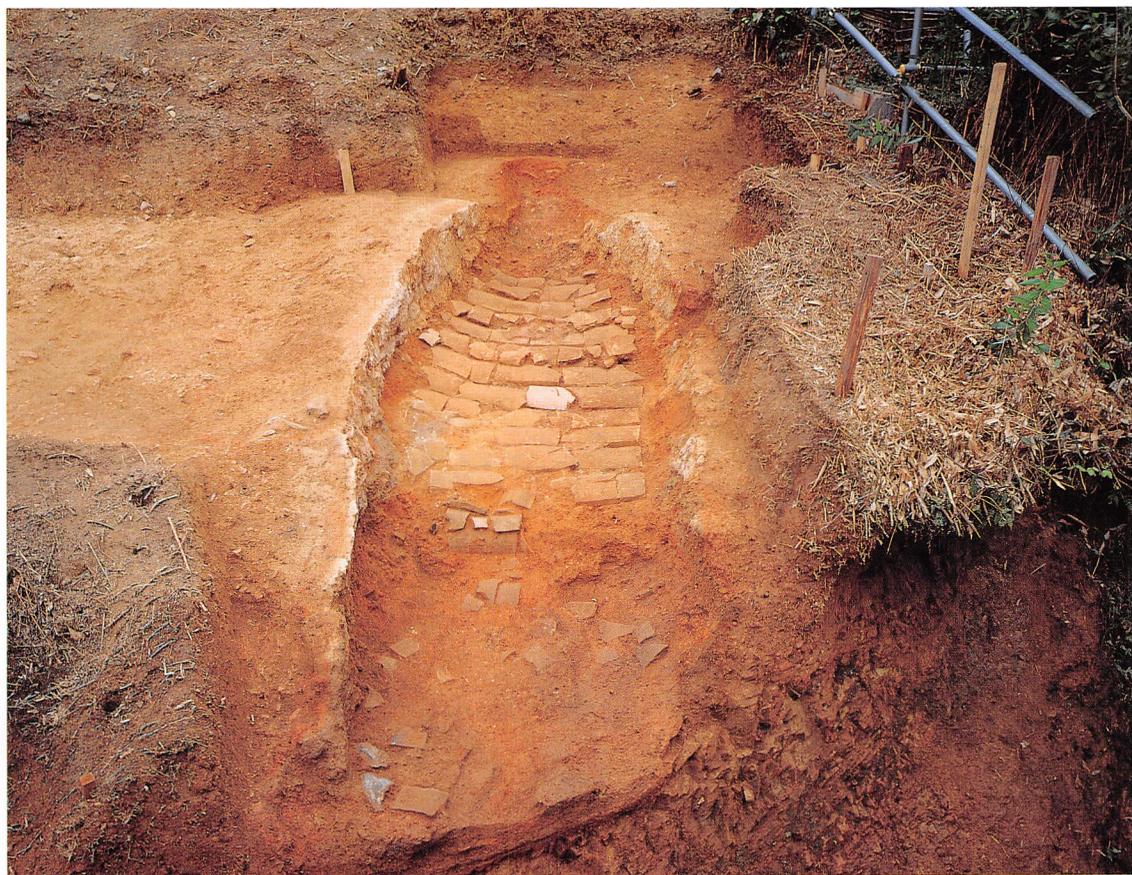
1993年 (財)京都市埋蔵文化財研究所

頁	行	(誤)	(正)
図版目次	図版19	遺物 遺物・軒平瓦	図版19 遺物 軒平瓦
4	1	1976年 (昭和51年)	1979年 (昭和54年)
	12	1976 (昭和51) 年	1979年 (昭和54年)
	註6	「昭和51年度…」…1979	「昭和54年度…」…1980年
8	7	前端の燃焼部・後端の煙道部	後端の燃焼部・前端の煙道部
11	14	(図版4・5-1・3・16・18)	(図版4・5-1-1・3・16・18)
13	8	(図版5-4…)	(図版5-1-18…)
	23	(図版6-1・2-2-1…)	(図版6-1・6-2左上…)
14	6	22号窯から	21号窯から
	10	弁間文	弁間文
19	26	第2次作業面	第2次作業面
20	註3	1982年	1983年
22	図14	写植=SD1内のSK1 下方のSK2	SX1 SX2
23	14	SK2	SX2
24	図15	写植=下方のSK2	SX2
30	2	86~88は	86~88 (図22) は
	3	二固体の…。89は	86・87は…。88は
	5	(図21) 43~88	(図21) 43~73
	10	椀58・59・61は	椀58・59・64は
	19	79~83・79・80	79~83・79・80
32	図22	SX3その他の	SX3・その他の
33	18	67~79に	69~79に
41	7	陰刻	陽刻
42	2	158・87	154・87
	5	(図版20-1)	(図版21-1)
	7	(図版20-2)	(図版21-2)
43	註9	『続群書従』	『続群書類従』
図版五		土器No=10	16



岩倉盆地の航空写真

[CKK-87-1 C2A-19]



上段 21号窯，下段 二彩釉陶器

## 序

四季折々に変化する趣のある景色と貴重な文化財が調和している京都は、日本の古都として毎年多くの入洛者を迎えます。私達が馴染み親しんだこのような風景は、平安建都以来の人々の営みの積重ねから生まれてきたものでした。

このような文化遺産のほかに、土に埋もれ、姿を隠してしまった文化財が数多くあることをもっと知って頂きたいと思えます。また、これらを愛護し、将来へ正確に伝えて行くことが今を生きるわたしたち市民の課題であろうと思えます。

このようなことから、埋蔵文化財の発掘調査を通して平安建都1200年の歴史のなかで失われ、姿を消した京都の文化遺産を現代に蘇らせ、ここから新しい文化を創造する糧と方法を学ぶことが、課題に答える方法の一つではないかと考えています。

本書は、京都市が平成4年度に文化庁の国庫補助を得て実施しました埋蔵文化財発掘調査の報告書であり、調査にあたって、ご支援とご協力を頂いた市民の皆様に心から感謝いたしますとともに、本書が文化財保護に役立てられることを期待いたします。

平成5年3月

京都市文化観光局

## 例 言

- 1 本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託して実施した、文化庁国庫補助を伴う平成4年度の栗栖野瓦窯跡発掘調査概要報告である。
- 2 本書の執筆担当は、I-1・IIIが吉村正親、I-2・IIが本弥八郎である。
- 3 写真撮影は遺構の一部を除き村井伸也、幸明綾子が担当した。
- 4 本書の編集は執筆者と近藤章子、伊藤 潔、小松武彦が行い、遺構、遺物の実測・トレース等は伊藤、近藤が協力した。
- 5 位置の記載は平面直角座標系VIによる。京都市遺跡発掘調査基準点を使用し、数値はX、Yともm単位で、標高は海拔高(T.P.)を使用している。
- 6 本書に使用した遺構の略記号は奈良国立文化財研究所の用例にしたがった。  
例 SD：溝 SK：土壙
- 7 本書に掲載した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市街図(縮尺：1/30,000)を複製して調整したものです。

# 目 次

I	栗栖野の位置と環境	1
1	位置と環境	1
2	これまでの調査	3
II	栗栖野瓦窯跡の調査（その1）	5
1	調査経過	5
2	遺 構	5
3	遺 物	11
4	ま と め	18
III	栗栖野瓦窯跡の調査（その2）	21
1	調査経過	21
2	遺 構	21
3	遺 物	27
4	ま と め	42

## 図版目次

巻頭図版1 岩倉盆地の航空写真

巻頭図版2 上段 21号窯

下段 二彩釉陶器

- 図版1 遺跡 1 調査前全景（北西から）  
2 調査区全景（南西から）
- 図版2 遺跡 1 21号窯第2次操業面（南から）  
2 21号窯第1次操業面（南から）
- 図版3 遺跡 1 22・23号窯、土塋1（南から）  
2 24号窯（北から）
- 図版4 遺物 1 21号窯出土須恵器  
2 21・22号窯出土須恵器
- 図版5 遺物 1 21～23号窯出土須恵器、施釉陶器  
2 21号窯出土二彩釉陶器
- 図版6 遺物 1 21・22号出土窯道具  
2 出土土器・軒瓦・窯体片
- 図版7 遺物 1 21号窯第1次操業面出土熨斗瓦  
2 21号窯第2次操業面出土熨斗瓦
- 図版8 遺物 1 「玉」銘熨斗瓦  
2 「玉」銘熨斗瓦  
3 2の部分拡大
- 図版9 遺物 1 22号窯出土丸瓦  
2 21号窯第1次操業面出土瓦（焼台）
- 図版10 遺物 1 21号窯第2次操業面出土瓦（焼台）  
2 22号窯出土緑釉熨斗瓦（焼台）
- 図版11 遺跡 調査区全景（北から）
- 図版12 遺跡 1 SX3 路面（東から）

## 2 SX3 路面完掘状況 (東から)

- 図版13 遺物 須恵器・窯道具  
図版14 遺物 緑釉陶器・須恵器各底部  
図版15 遺物 白色土器・白磁碗  
図版16 遺物 軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦  
図版17 遺物 軒丸瓦  
図版18 遺物 軒平瓦  
図版19 遺物 遺物・軒平瓦  
図版20 遺物 鷗尾・鬼瓦  
図版21 遺物 1 緑釉熨斗瓦  
                  2 埴  
図版22 遺物 1 平瓦  
                  2 丸瓦

## 挿 図 目 次

図1 調査地と周辺生産遺跡位置図 (1/30,000) .....	2
図2 栗栖野窯跡分布・調査位置図 (1/1,000) .....	3
図3 遺構配置図 (1/200) .....	6
図4 21号窯実測図 .....	7
図5 22号窯実測図 .....	9
図6 23号窯実測図 .....	10
図7 21～23号窯出土遺物 .....	12
図8 二彩釉陶器 .....	13
図9 窯道具類 .....	14
図10 24号窯出土軒平瓦 .....	15
図11 21号窯第1次操業面出土熨斗瓦 .....	16
図12 21号窯第2次操業面出土熨斗瓦 .....	17
図13 「玉」銘熨斗瓦 .....	18
図14 遺構配置図 (1/300) .....	22

図15	遺構実測図	24
図16	S X 3 実測図	25
図17	遺構断面図 (1/80)	26
図18	古墳時代遺物	27
図19	S X 3 出土土器	28
図20	S X 3 出土土器	29
図21	S X 3 出土土器	31
図22	S X 3 ・ その他の遺構出土土器	32
図23	出土軒丸瓦 (1/4)	34
図24	出土軒丸瓦 (1/4)	35
図25	出土軒丸瓦 (1/4)	36
図26	出土軒平瓦 (1/4)	37
図27	出土軒平瓦 (1/4)	38
図28	出土軒平瓦 (1/4)	39
図29	軒丸・軒平瓦断面図	40
図30	「木工」銘平瓦	41
図31	瓦ヘラ記号 (1/4)	41
図32	「上」銘軒平瓦	42

## 表 目 次

表 1	出土瓦一覧表・文献一覧	44
-----	-------------	----

# I 栗栖野の位置と環境

## 1 位置と環境

岩倉盆地<sup>註1</sup>は、東に比叡山、南に松ヶ崎山地、西に本山々地、北は丹波山塊（瓢箪崩山々地）に挟まれて、沖積層により埋積された小さい盆地である。そのうち窯跡に関係する松ヶ崎山地は、北の丹波山地の小起伏面の一部であって、新第三紀鮮新世や第四紀更新世の埋積から残されたものである。そのため丘陵には丹波の中・古生層のチャートが屈曲している様子が顕著にみられる。

盆地には、市原方向からの長代川・岩倉川、八瀬からの高野川が流れており、松ヶ崎丘陵と氷室山の間を通る高野川がすべての水流を、山城盆地へと排出している。岩倉盆地には、「岩倉五山」と呼ばれた丘陵があったが、一条山をはじめ、幡枝丘陵を含め、景観を変化させる開発が進行しているため激変している。栗栖野瓦窯のある地区は、古くから幡枝と呼ばれる寒村であった。ここに京方面から入るには二つルートがある。一つはケシ山の西側隘路を通して円通寺に至るもので、集落はこの道に沿って発達している。もう一つ東側を越えるのが深泥池の西や北の岸を通るもので、現在はバスの通る主要道になっている。

窯跡は、深泥池の北岸から、幡枝地区にかけて密集している。主なものとして、(19) 幡枝元稻荷窯跡・(2) 栗栖野瓦窯跡・(23) 南ノ庄田瓦窯跡・(21) 円通寺瓦窯跡・(15) 木野墓窯跡・(22) ケシ山瓦窯跡・(26) 深泥池御用窯跡等が知られていた。これらの遺跡を<sup>註2</sup>発見し世に知らしめたのは、1929年頃の若き木村捷三郎氏であった。氏はこれを『史林』に発表し、小野瓦屋、栗栖野瓦屋を明らかにした。

一方西賀茂地区にも(3～12)の各窯跡が存在している。(4) 蟹ヶ坂瓦窯跡は出雲寺廃寺の瓦を焼いた所で、すでに調査がなされている。(3・5・9・10・11)の各窯は、平安宮に関する重要な瓦窯である。この内(9) 鎮守庵瓦窯跡<sup>註3</sup>、(10) 角社瓦窯跡<sup>註4</sup>は調査がなされ報告もされている。その成果によると、緑釉瓦生産地は、岸部瓦窯→角社瓦窯→栗栖野瓦窯と言った流れを持つことが分かった。

緑釉陶器に関しては、洛北窯（栗栖野窯・本山遺跡・妙満寺窯）から小塩窯さらに亀岡篠窯へ移行してゆく。一方造瓦は平安時代後期になっても(2) 栗栖野窯跡・(23) 南ノ庄田瓦窯跡では、瓦生産が盛行し、中央官窯系瓦生産の中心を形成していた。



- |                  |                    |                  |                  |
|------------------|--------------------|------------------|------------------|
| 1 栗栖野瓦窯跡         | 9 鎮守庵瓦窯跡           | 17 妙満寺裏庭窯跡 (須惠器) | 25 木野墓窯跡         |
| 2 栗栖野瓦窯跡 (国指定史跡) | 10 角社瓦窯跡           | 18 妙満寺窯跡         | 26 深泥池瓦窯跡        |
| 3 上ノ庄田瓦窯跡        | 11 河上瓦窯跡           | 19 元稻荷窯跡         | 27 深泥池東岸窯跡 (須惠器) |
| 4 蟹ヶ坂窯跡          | 12 大宮北 (山) 前瓦窯跡    | 20 須惠器窯跡         | 28 芝本瓦窯跡         |
| 5 醒醐ノ森瓦窯跡        | 13 中の谷窯跡 (須惠器)     | 21 円通寺瓦窯跡        | 29 瓦窯跡           |
| 6 船山須惠器窯跡        | 14 中の谷4号窯跡 (灰釉)    | 22 ケン山灰燵窯跡       | 30 はぶ池窯跡 (須惠器)   |
| 7 正伝寺須惠器窯跡       | 15 木野窯跡 (須惠器)      | 23 南ノ庄田瓦窯跡       | 31 木野瓦窯跡         |
| 8 大深町須惠器窯跡       | 16 本山遺跡 (本山窯跡、須惠器) | 24 窯跡 (散布地)      |                  |

図1 調査地と周辺生産遺跡位置図 (1/30,000)

## 2 これまでの調査

史跡である栗栖野瓦窯跡を中心とした地域の調査は、立会調査などを含め今回で8度目となる。そこで、再整理の意味でこの地域の窯跡と調査位置（図2）をまとめてみた。

栗栖野瓦窯は木村捷三郎氏により発見され、1930年（昭和5年）に京都府史蹟勝地保存委員会により1・2号窯<sup>註5</sup>が調査されている。史跡に指定されたのは1934年（昭和9年）で

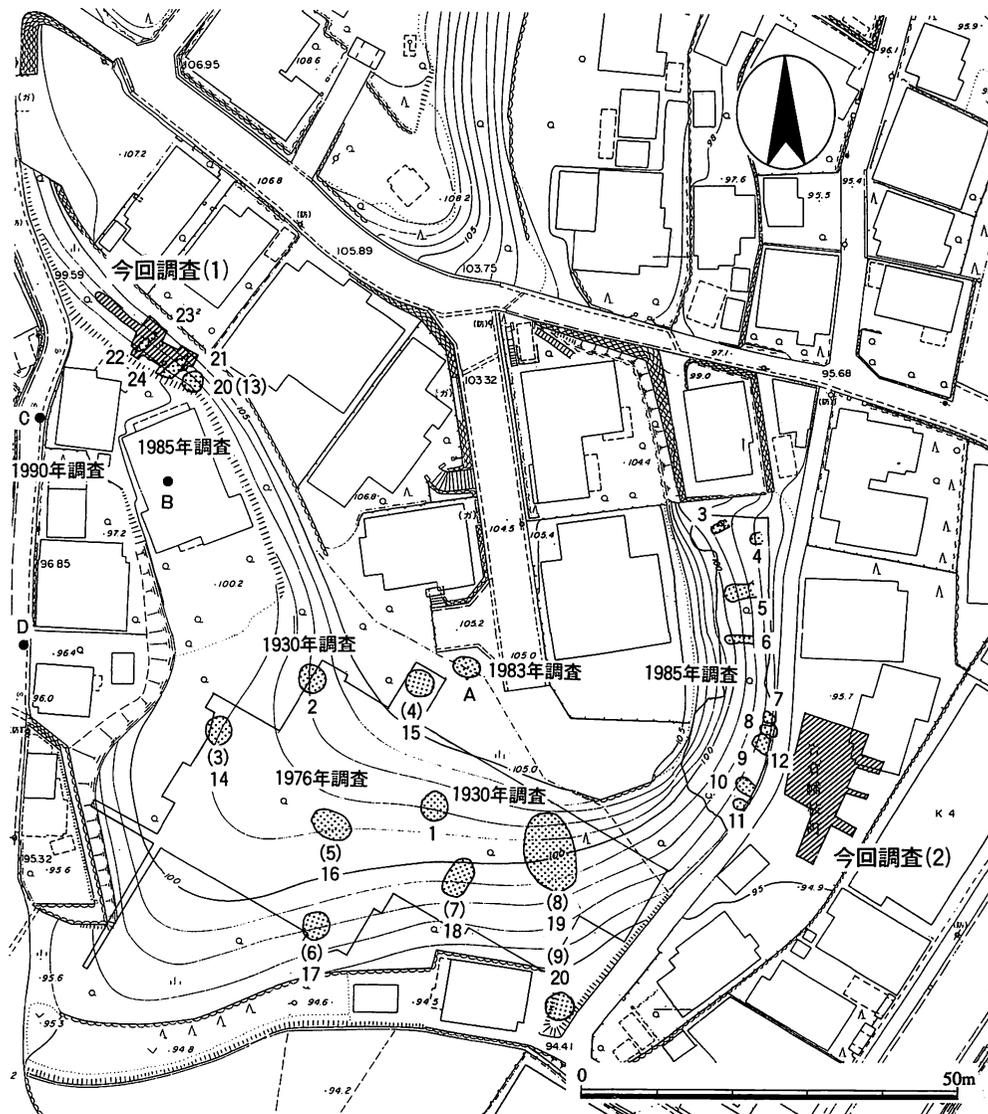


図2 栗栖野窯跡分布・調査位置図 (1/1,000)

ある。それ以降、1976年（昭和51年）には同指定地内で、京都市文化観光局文化財保護課から委託を受け当研究所が磁気探査等による確認調査を実施した。その調査では、1・2号窯の再確認と新たに6基の窯を確認し、またすでに存在が知られていた窯を9号窯とした。1983年には京都大学考古学研究会の踏査で史跡指定地の北端部において造成工事中に窯跡を発見した。場所は史跡地北側のA地点であるが窯番号は付けられていないようである。1985年（昭和60年）4月には、指定地外の丘陵東側で京都市埋蔵文化財調査センターが調査を実施し、10基の窯（3～12号窯）を新たに発見した。また同年6月には、指定地の北西約40mのB地点において当研究所が実施した建物の基礎工事に伴う立合調査で、灰原から緑釉瓦、窯道具などを発見し、同時に隣接する崖面で20号窯を発見している。なおC・D地点は、1990年5月から実施した立会調査で鷗尾等の窯関連遺物を採集している。したがってこれまでに発見された窯はA地点の窯を除けば20基であり、今回新たに検出した4基の窯は検出順に21～24号窯とした。ただし、1976（昭和51）年の確認調査での発見分は、1985年の調査時には加えられていない。また『京都府遺跡地図』では、調査概報に記載された窯番号とは別番号が付けられている。しかし報告書ではすでに窯番号が明記されており、今回は確認調査時の窯番号も（ ）で併記した。

- 註1 『土地分類基本調査—京都東北部・京都東南部・水口—』京都府農林部耕地課 1984年  
 註2 木村捷三郎「山城幡枝発見の瓦窯址」『史林』第15巻第4号 1930年  
 註3 「西賀茂鎮守庵瓦窯址発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告』京都市文化観光局文化財保護課 1971年  
 註4 平安博物館考古学第三研究室編『平安京跡研究調査報告第4—西賀茂瓦窯跡—』（財）古代学協会 1978年  
 註5 「栗栖野瓦窯調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告書』第15冊 1930年  
 註6 石井 望「I 史跡栗栖野瓦窯跡」『昭和51年度 平安京発掘調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所編・京都市文化観光局 1979年  
 註7 京都大学考古学研究会『Trench』岩倉踏査報告35 1983年  
 註8 北田栄造・長谷川行孝『昭和60年度 栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』京都市文化観光局 1986年  
 註9 平尾政幸・家崎孝治「栗栖野瓦窯跡」『昭和60年度 京都市内遺跡試掘立会調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所編・京都市文化観光局  
 註10 久世康博ほか「X 栗栖野瓦窯跡」『平成3年度 京都市内遺跡立会調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所編・京都市文化観光局 1992年  
 註11 京都府教育委員会 京都府遺跡地図 大分冊 [第2版] 1989年  
 註12 京都大学考古学研究会「第1章 5 平安時代以降の窯業生産」『岩倉古窯跡群』1992年

## II 栗栖野瓦窯跡の調査（その1）

### 1 調査経過

調査地は、京都市左京区岩倉幡枝町665-49である。当該地は四方を山に囲まれた岩倉盆地にある独立小丘陵の南西端に位置し、地形は切り立った崖と狭小な丘陵斜面からなる。

今回この崖面で擁壁工事が計画された。当地の南約40mには、1934（昭和9）年に国の史跡に指定された栗栖野瓦窯跡があるが、その後の調査で史跡指定地外にも窯跡が広がる事が判明しており、また1985（昭和60）年には今回の調査地の東隣で実施した立会調査で窯跡を1基確認している。当該地については、京都市埋蔵文化財調査センターと原因者との協議の結果、発掘調査を実施する運びとなった。調査の対象面積は239㎡である。

調査地は北西から南東に延びる細長い地形であり、調査区を設定する前に、まず崖面部分での遺構の有無を確認するための検出作業から着手した。その結果、南東部崖面で窯跡と判断できる遺構を1基確認した。その後、丘陵斜面の樹木の伐採、地形測量を行った。測量図（図3）では丘陵斜面に段が認められるが、北側の石垣構築時の残土であることが後に判明した。調査区は、先に遺構を検出した南東側の崖上斜面に設定し、さらに北西に向け確認の為にトレンチを延ばした。調査成果としては4基の窯跡と2基の土壌を検出した。調査面積は40.5㎡である。

### 2 遺 構

調査で検出した遺構は平安時代の窯跡4基と土壌が2基である。窯跡の3基が平安時代前期、1基が平安時代後期である。最初に調査区の南東端の崖面で確認した21号窯を検出し、この窯の西に接して24号窯、さらに北西5mの位置に22号窯、23号窯を検出した。4基のなかで最も残りが良好なのは21号窯で、他は削平等が激しく、わずかに窯と判断できるものである。4基の窯の主軸は、いずれも北東から南西方向で、南西側が焚口となる。

土壌は平安時代前期のSK2と室町時代のSK1で、遺構の性格は不明である。

**21号窯**（図版2-1・2、図4） 窯体が崖面に露出していた窯で、焚口と燃烧部の一部は過去の造成工事で削り取られている。窯の構造は、灰黄色砂泥層と黄褐色の岩盤を一部掘り込んだ半地下式窖窯で、検出時の平面形はトックリ状を呈する。窯跡は、検出長4.8

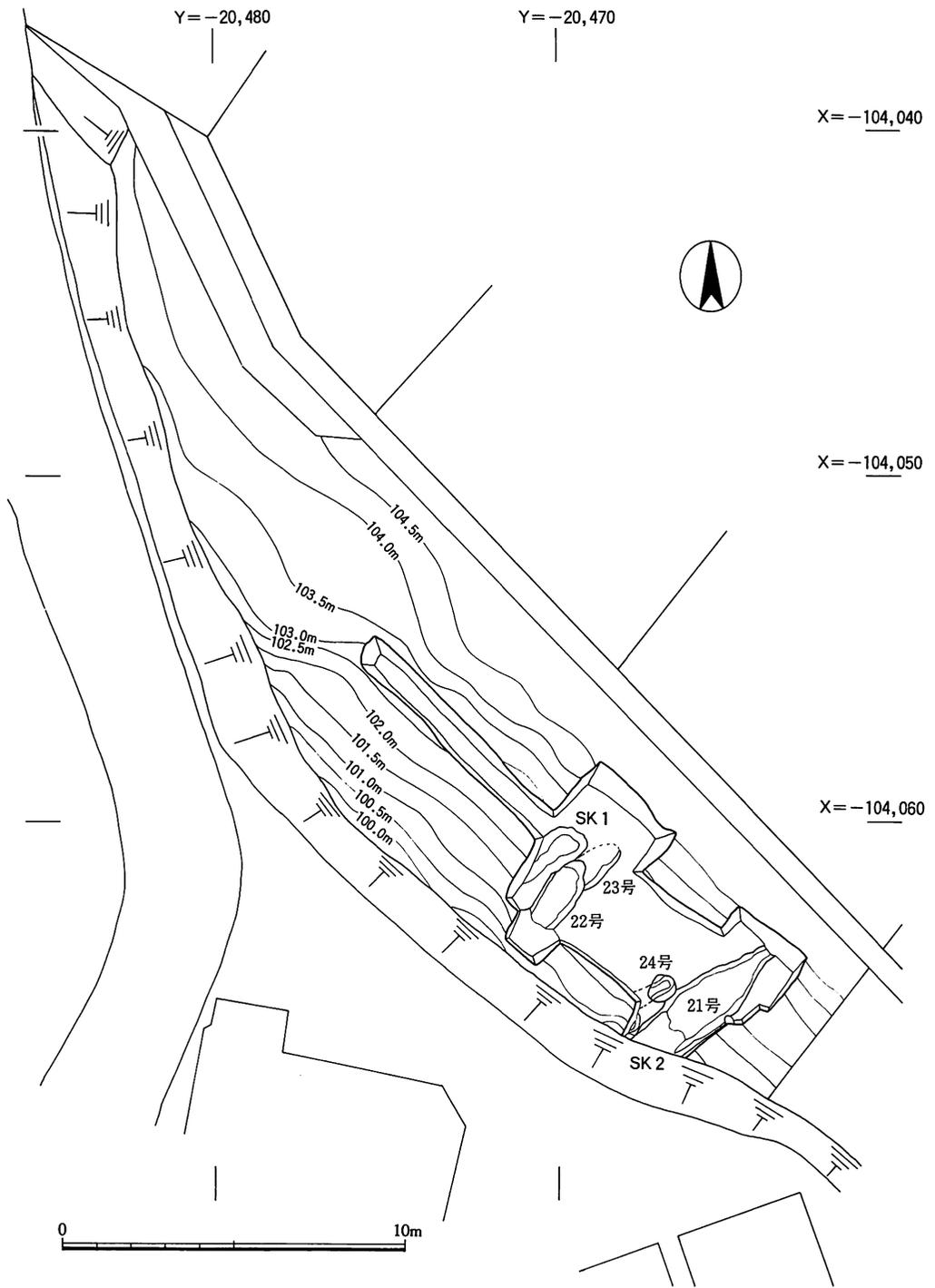


图3 遺構配置図 (1/200)

m、最大幅1.5m、深さ約50cmが残存し、作業面は2面ある。

第1次作業面の燃焼部の床面幅1.1m、検出長が1.3mである。床面は部分的に青灰色に焼き締っており、不規則だが、床面には据えたとと思われる瓦片があり、その瓦片や床面に

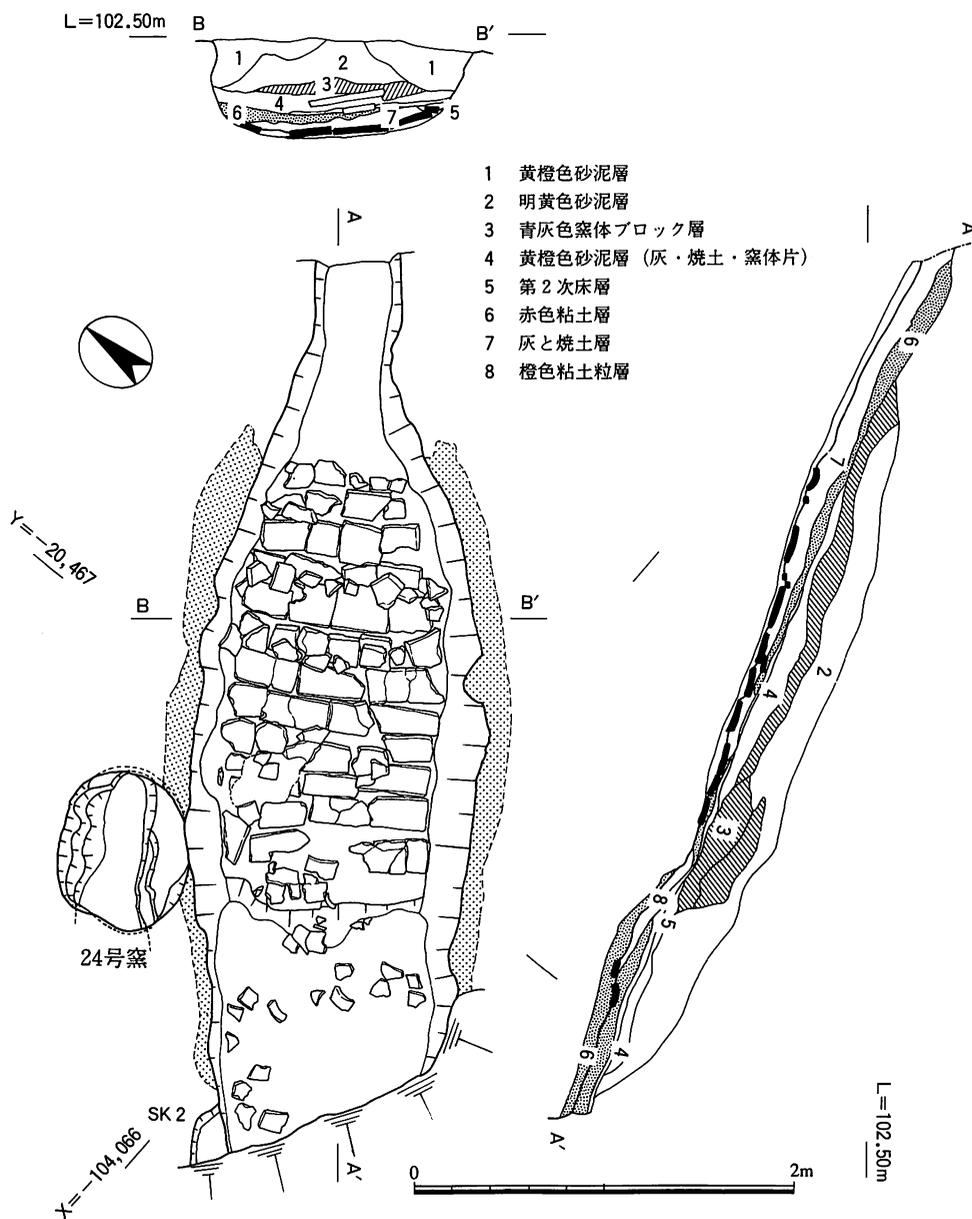


図4 21号窯実測図

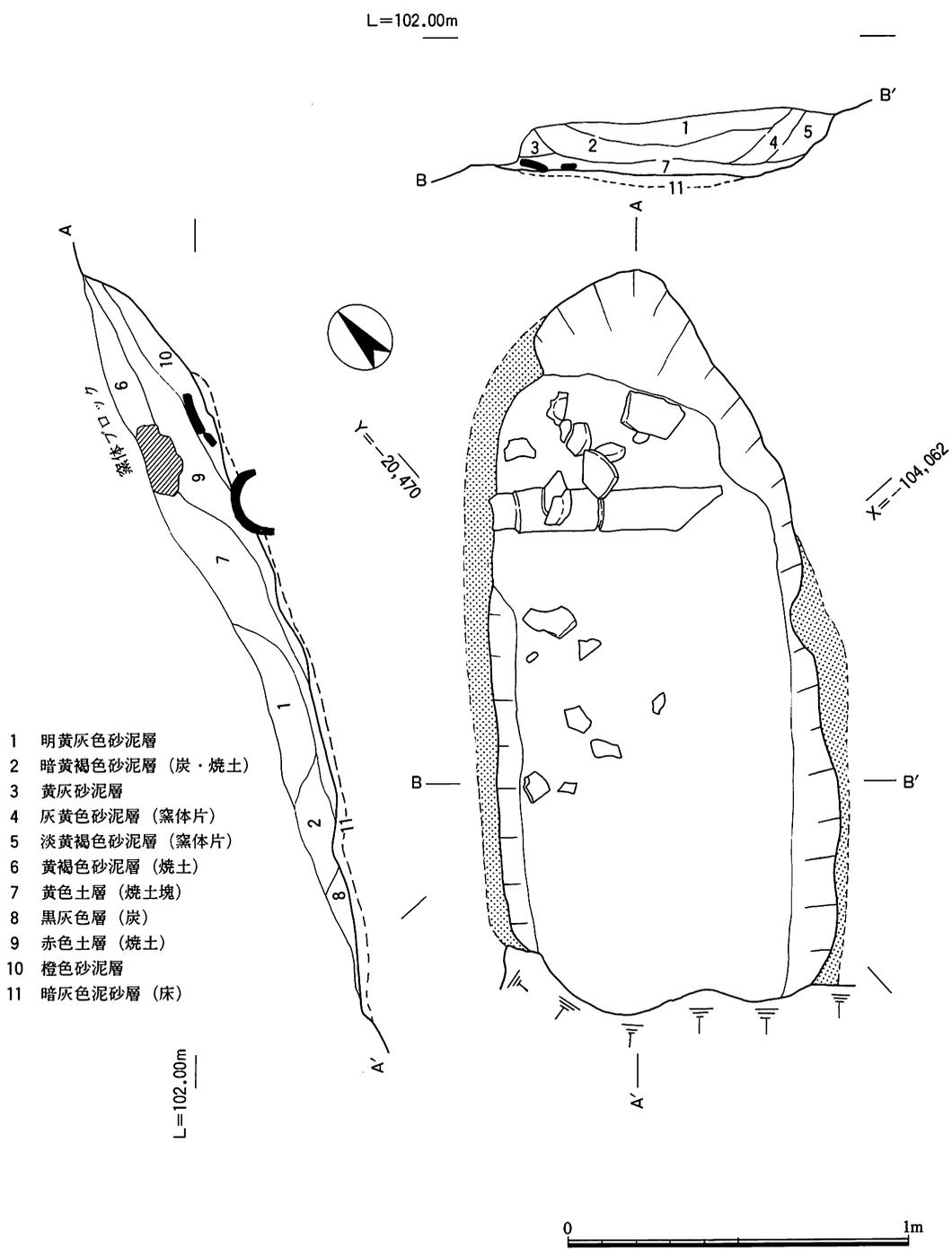
釉滴が多量に付着する。燃烧部と烧成部の間には高底差15cmの緩やかな段があり、その斜面に堆積する黄橙色の焼土粒層からまとまってトチン類、二彩釉陶器が出土した。なお同床面下層は厚さ約15cmの赤変した粘土層であるが、焚口に近い30cm部分だけは灰を含む硬い層が中間に3層認められた。烧成部の床は全長2.4m、幅は中央で最大幅1.2mを測り、前端で0.6m、後端で1.0mである。床面の左右中央部はわずかに舟底状にくぼみ、床面には瓦が敷かれる。瓦の敷き方は、半裁した熨斗瓦<sup>註1</sup>の凸面を上にして、長辺を竈中軸に直交するかたち横に4枚、それを前後に11列並べる。前端的燃烧部・後端的煙道部との境には丸瓦を各一列並べる。なお床上部に敷かれた熨斗瓦の間隙上にはこれをふさぐかたちで小破片の瓦が並べられている。その間隔は36～40cmである。小破片の瓦は1個体の熨斗瓦、丸瓦を割って使用しており、瓦片には釉滴が認められる。床面に敷かれた熨斗瓦上には薄く灰層が覆い、その上に焼土と崩れた竈体片が堆積する。床面の傾斜は約23度である。煙道部は長さ1mまで検出したが煙出し部までは確認できなかった。煙道の幅は45cmである。

第2次操業面は、第1次操業竈が崩壊した竈体片の上に粘土を置き構築する。第1次操業面の約10cm上部である。烧成部、燃烧部の床面は各所で青灰色に固く焼き締まっている所が認められる。床面には、第1次操業面で見られたような整然とした瓦敷きの施設は無く、一部床に埋まる状態の瓦は認められるが規則性はない。床面からは、烧台上に転用した釉滴の付着した熨斗瓦類と皿を主体とした須恵器類が多数散乱した状態で出土した。

出土した須恵器はこの竈の最終烧成品である。床面上層には焼土・スサ入り粘土塊が崩落した状態で検出された。第2次操業面の規模は第1次操業面とほぼ同じであるが、燃烧部と烧成部は緩やかな傾斜面によって区別できる。

**22号竈**(図版3-1、図-5) 21号同様半地下式窖竈と考えられ、燃烧部と烧成部の一部が残存している。検出長は2.2m、床面までの深さは東壁部分で30cmあり、西側壁はSK1により床面まで削平されている。燃烧部と烧成部の境に丸瓦2本を横一列に並べて段をつくる。燃烧部の床面幅は85cm、烧成部までの残存長は1.4mある。烧成部の床面幅は65cm、残存長35cmである。床面・側壁は全体に固く焼き締まり、燃烧部には灰が5cm程度堆積する。床面からの出土遺物には須恵器皿・杯、緑釉熨斗瓦などがあり、前述の敷設した丸瓦の下からは三叉トチンが2点出土している。

**23号竈**(図版3-1、図-6) 21号と同様の構造が考えられる。22号竈構築時に大半が破壊されており、西側壁はSK1により削平され、残存するのは烧成部の東側壁と床面の一部のみである。検出長は1.3m、床面幅70cm、残存する深さは東側壁下で約20cmある。床



- 1 明黄灰色砂泥層
- 2 暗黄褐色砂泥層 (炭·烧土)
- 3 黄灰砂泥層
- 4 灰黄色砂泥層 (窯体片)
- 5 淡黄褐色砂泥層 (窯体片)
- 6 黄褐色砂泥層 (烧土)
- 7 黄色土層 (烧土塊)
- 8 黑灰色層 (炭)
- 9 赤色土層 (烧土)
- 10 橙色砂泥層
- 11 暗灰色泥砂層 (床)

图5 22号窰実测图

面はよく焼き締まっており、傾斜は約24度ある。床面からの出土遺物には焼台に使われた熨斗瓦片と床に伏せた状態の完形の須恵器皿が1点ある。

24号窯(図版3-2、図-4) 煙道の一部と先端部の煙出し部分のみが残存するもので、窯本体は削平され全体の構造は不明。検出時の平面形は長径85cm、短径70cmの楕円を呈する。構造は、ほぼ垂直に約25cm掘り込み、ついで煙道部を幅約30cm、深さ20cmに細長く掘り、下方へは30cm丘陵斜面を穿つ。煙道の傾斜は17度である。煙道は全体に固く焼けて赤変する。煙出しの上部からは、崩落した状態の多量の丸・平瓦と剣頭文軒平瓦が1点出土している。

SK1(図版3-1) 22・23号窯の西側に接して検出した。形状は不整形な長楕円形で、

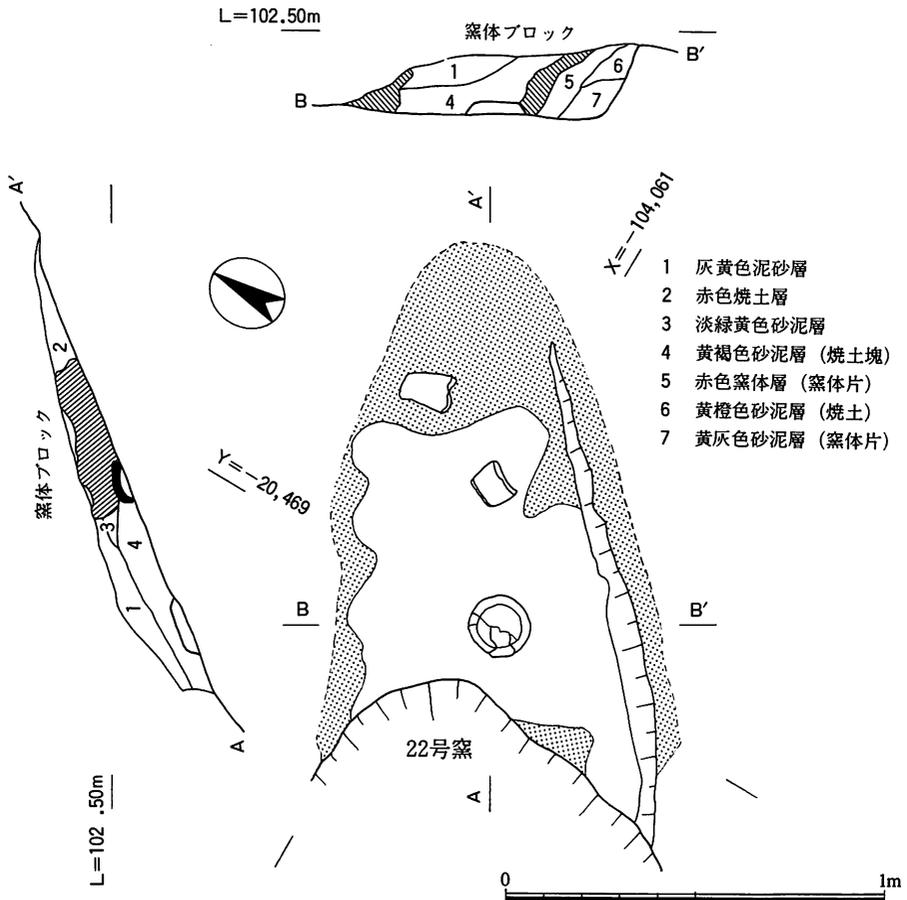


図6 23号窯実測図

長径2.7m以上、短径約1.0m、深さ約25cmで、底部は丘陵下方に向け傾斜する。埋土は明褐色砂泥層で、出土遺物には室町時代の土師器の他に熨斗瓦、緑釉陶器、須恵器などがあり、窯の遺物が多く混入する。

SK2(図-4) 21号窯の西壁を切って成立するが、深さ30cmである以外に形状は不明。出土遺物には、焼台に転用した熨斗瓦と緑釉陶器碗の素地がある。

註1 木村捷三郎『造瓦と考古学「木村捷三郎先生頌寿記念論集」』1976年「本邦における埴瓦の研究」で、焼成前に半裁の為の分割線を入れた瓦。

### 3 遺物

出土遺物は整理箱にして31箱である。時代別では、平安時代初期・後期、室町時代、江戸時代のものがある。遺物の内容は、平安時代では瓦類が大半を占め、他には須恵器、緑釉陶器、二彩釉陶器、窯道具類がある。室町時代ではSK1より出土した土師器がある。江戸時代では陶磁器類が若干出土している。ここでは平安時代の遺物について述べる。

#### 土器類

須恵器(図版4・5-1・3・16・18、図7-1~19) 21~23号窯から出土した。器種には杯、皿、平瓶などがある。

杯(図7-1~3) (1)は、底部が回転ヘラオコシのまま、体部はやや内湾しつつ立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。底部内面は横ナデ。胎土は精良。軟質で淡黄白色を呈す。口径14.0cm、器高3.2cm。21号窯第2次操業面出土。(2)は、体部が少し内湾して立ち上がる。胎土は粗く、やや軟質で全体が黒変する。口径14.8cm、器高3.2cm。21号窯第2次操業面出土。(3)は、底部から斜め上方に直線的に伸びる体部に鋭角の口縁がつく。胎土は粗く、硬質で淡灰色を呈す。口径13.0cm、器高3.2cm。22号窯床下より出土。

皿(図7-4~17) 21号窯第2次操業面からは(5~15)が出土している。全体的な器形の特徴は、体部が斜め上方に直線的に伸び、口縁端部は斜め外下方に面をなす。外底部の調整は、(5~8・10・12~15)には外周やや内側に強いナデを施し段をなすが、(9・11)は平坦である。口径は17cmと18cmに大別できる。大半がやや軟質で黒変している。(4)は21号窯第2次操業面床下より出土。器形の特徴は口縁端面をやや外下方につまみだす。胎土は精良。軟質で淡黄色を呈す。口径18.0cm、器高1.9cm。(16)は23号窯床面より出土。底部は未調整で、体部は薄手でやや内湾しつつ立ち上がる。胎土は精良。軟質で淡黄白色

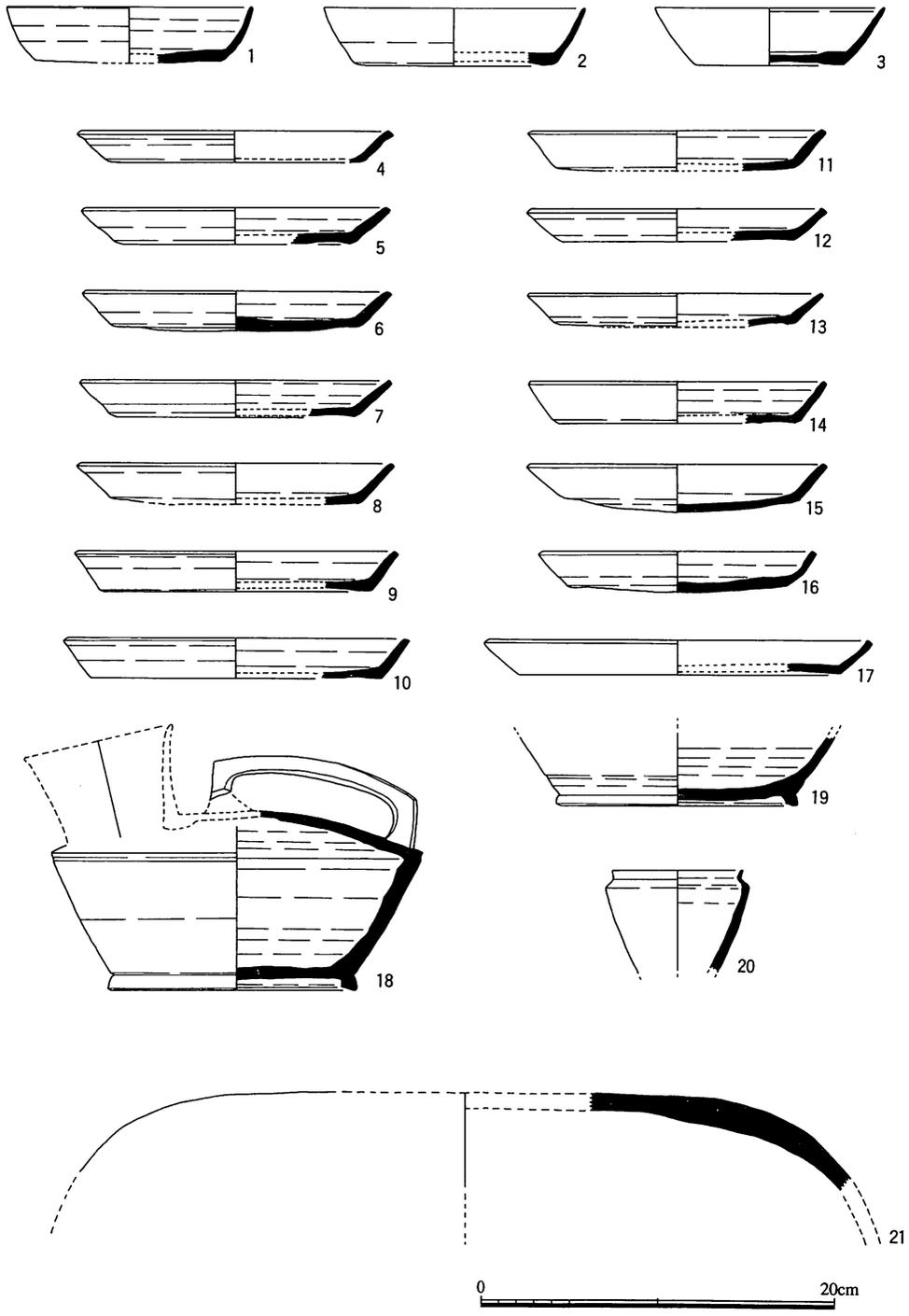


图7 21~23号窑出土遗物

を呈す。口径15.6cm、器高2.3cm。完形。(17)は22号窯床面より出土。口縁端部が内にわずかに肥厚する。焼成は良好で青灰色を呈す。口径22.0cm、器高2.0cm。

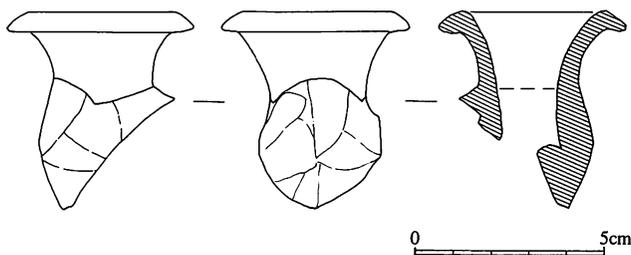


図8 二彩釉陶器

**平瓶**(図版5-4・4-2-19、図7-18・19) 2点とも21号窯第2次操業面より出土。(18)は注口部を欠くが他は完形にちかく、焼成は硬く青灰色を呈す。破片は床面全体に散乱していたもので、器壁に焼成時の割れが認められる。体部最大径21.0cm、高台径14.0cm。(19)は底部の破片。硬質で青灰色を呈す。高台径13.6cm。

**緑釉小壺**(図版5-1-20、図7-20) 筒状の体部に直立する短い受け口をもつ。底部は欠失する。釉は内外面に認められ、色調は内面が淡黄緑色、外面は赤褐色と緑褐色の斑状となっており、二彩釉の可能性もある。焼成は硬質。胎土は緻密で灰白色を呈す。口径7.4cm。21号窯第2次操業面出土。

**二彩釉陶器瓶**(図版5-2、図8) 肩口に複数の小注口を持つ多口瓶で、出土したのは接合部から剥落した小注口の一つである。花卉状に浮き彫りを施した基部に漏斗状に広がる頸部をもち、口縁端部はやや外下方に折り曲げ、端面は丸くおさめる。口径5.0cm、高さ5.2cm。施釉された釉薬は緑釉と白釉で、緑釉を口縁部から縦方向に三方に塗り分ける。緑釉は鮮やかな深緑で、白釉部分は淡黄緑色に発色する。胎土は灰白色で緻密。焼成は半硬質である。本体との接合が不十分なためか接合面に釉が流れ込んでおり、また落下して融着した痕跡が口縁上端面に認められる。21号窯第1次操業面出土。

**窯道具**(図版6-1・2-2-1、図7-21・図9) 窯道具にはトチンとサヤの破片と考えられる土器片がある。トチンは21号窯第1次操業面から21点、22号窯から8点出土している。形態は2種あり、(2~15)は三つの支脚の先端部に上下に支点をつくる。手づくねで、胎土は精良。緑釉あるいは黄褐色の釉が付着する。これらの支脚先端を共有する径を測ると、8cm前後、5.2~6.5cm、1.8cmとがあり、計測不能の大型(14・15)もある。もう1種(16)は、破片であるが、過去の出土例からすると、三つの支脚を基部から上・下方に伸ばすタイプである。(1)は小型のトツ状で鼓胴形を呈する。これと同様なものが愛知県猿投窯跡でも出土している。(2・3)は22号窯、それ以外は21号窯から出土した。(21)

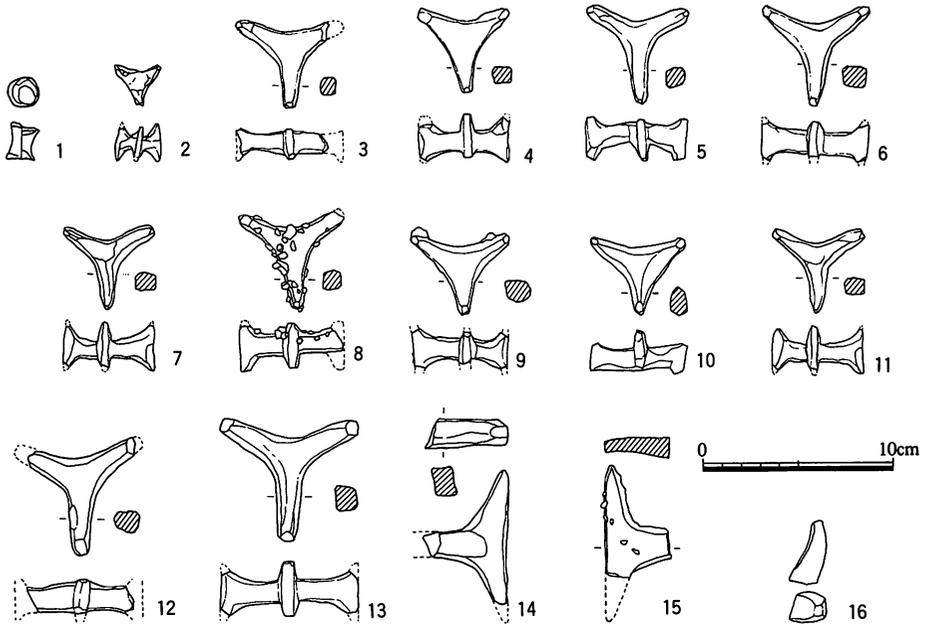


図9 窯道具類

は破片で、全体の形状は不明である。器面には輪積み痕が残り、内面は指オサエ、外面はナデ調整され比較的整っている。胎土はやや粗く、砂粒を多く含む。全体が淡い桃色を呈す。外面には釉滴と灰の付着した痕跡がわずかにみられる。

#### 瓦 類

21～23号窯から瓦類が多く出土した。内容は平・丸・熨斗瓦、鷗尾である。その大半が22号窯からで、第1次操業面では、床に敷かれた分も含めて204点、第2次操業面からは105点出土した。その半数以上が熨斗瓦であることが特徴的であり、第1次操業面では65%、第2次操業面では53%にのぼる。また3基の窯で出土した緑釉熨斗瓦は20点、平瓦14点、丸瓦160点、鷗尾が2点ある。24号窯からは平・丸瓦と軒平瓦が1点出土している。

**複弁蓮華文軒丸瓦**(図版6-2右上) 弁間文と界線をもつ。胎土は粗く、焼成は比較的硬質である。遺構外の積み土層より出土した。

**剣頭文軒平瓦**(図版6-2左下、図10) いわゆる「半折り曲げ式」である。瓦当外周下部はヘラケズリし、顎部は横方向のナデ、平瓦部凸面には縦方向の調整痕が認められる。胎土は黄白色を呈し、軟質。24号窯より出土。

**熨斗瓦**(図版7、図11・12) 21号窯第1次操業面に敷かれた熨斗瓦(図版7-1、図11)は、その他のものと胎土・調整等は同じである。凸面は平行タタキのうえ両側縁を篋で平

滑に整える。調整幅は5cm～12cmの範囲であり、7.5cm～9.5cmに集中する。

側縁の端に調整台の圧痕がほとんどの例にみられ、縄目タタキの部分にハナ



図10 24号窯出土軒平瓦

レ砂が認められる。凹面は糸切り・布目・模骨痕が明瞭で、中央に半裁の為の深さ2mm～8mmの分割線を有する。両側面は篋で平滑に仕上げるが、両端面は未調整。全体形状は狭端、広端のない長方形である。接合して瓦の全長を計測可能なものが3点あり、43.0cm・43.1cm・43.8cmを計る。また瓦幅の判るものが9点あり、29.0cmから32.0cm内で、反りは5.3cm～5.8cmである。半熨斗状態では39点が幅を計測でき、14.3cmから17.7cmまでである。しかし半裁の分割線は側縁に対し必ずしも平行ではない。敷かれた瓦のほとんどが軟質で淡黄灰色を呈す。厚さは2.5cmから3.8cmまでである。第2次操業面からは完形品が1点(図版7—2、図12)出土している。凸面のタタキ痕はすべて消されており、両側縁約8cmを篋で特に平滑にする。凹面には糸切り・布目・模骨痕を残す。側面、端面ともに顕著なナデ等の調整は認められない。長さ42.3cm、幅28.7cm、厚さ2.5cm、反り4.5cm。焼成は硬質で淡灰色を呈す。第1次操業面の熨斗瓦で凹面端部ちかくに「玉」字を刻印したものが2例(図版8、図13)ある。字体はすべて同じで、文字面には布目が認められる。(1)は端部に沿って5文字、(2)は端部とその下中央寄りに2文字みられる。この2点のみが厚さ3.8cmあり、特別な用途が考えられる。

**丸瓦・平瓦** 丸瓦は破片数で21号窯第1次操業面から72点、第2次操業面から67点、22号窯から21点出土した。そのうち釉滴が認められ、焼台及び窯の施設に転用されたものが141点である。長さを計測できるのは22号窯の窯施設に転用された1点(図版9—1)のみで、43.0cmある。丸瓦部の幅については、17.7cmから19.5cmの間に4点、20.5cmから22.4cmの間に6点あり、それらはいずれも凸面の片側に釉が付着しており、21・22号窯にみられる燃焼部と焼成部との境に使用されたものと考えられる。21～23号窯から出土した平瓦は小破片であり、確実にそれと認められるのは総数で14点にすぎない。

焼台転用の瓦で緑釉の付着が顕著なものに、21号窯第1次操業面(図版9—2)・21号第2次操業面(図版10—1)があり、緑釉熨斗瓦(図版10—2)も転用されている。

#### その他の遺物

**窯体**(図版6—2右下) スサ入りの粘土塊。21号第2次操業面上部より特に多く出土している。

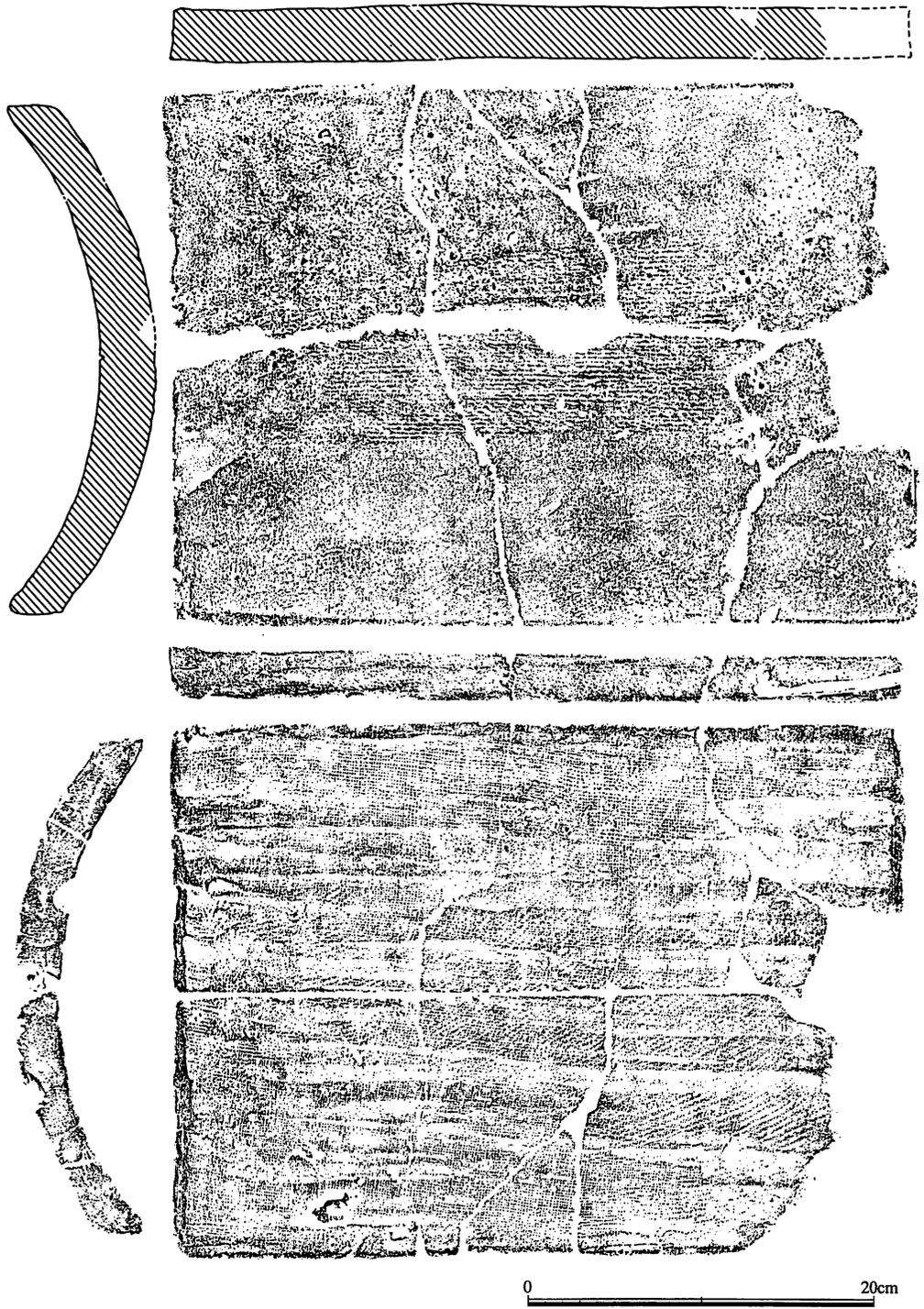


图11 21号窰第1次操業面出土熨斗瓦

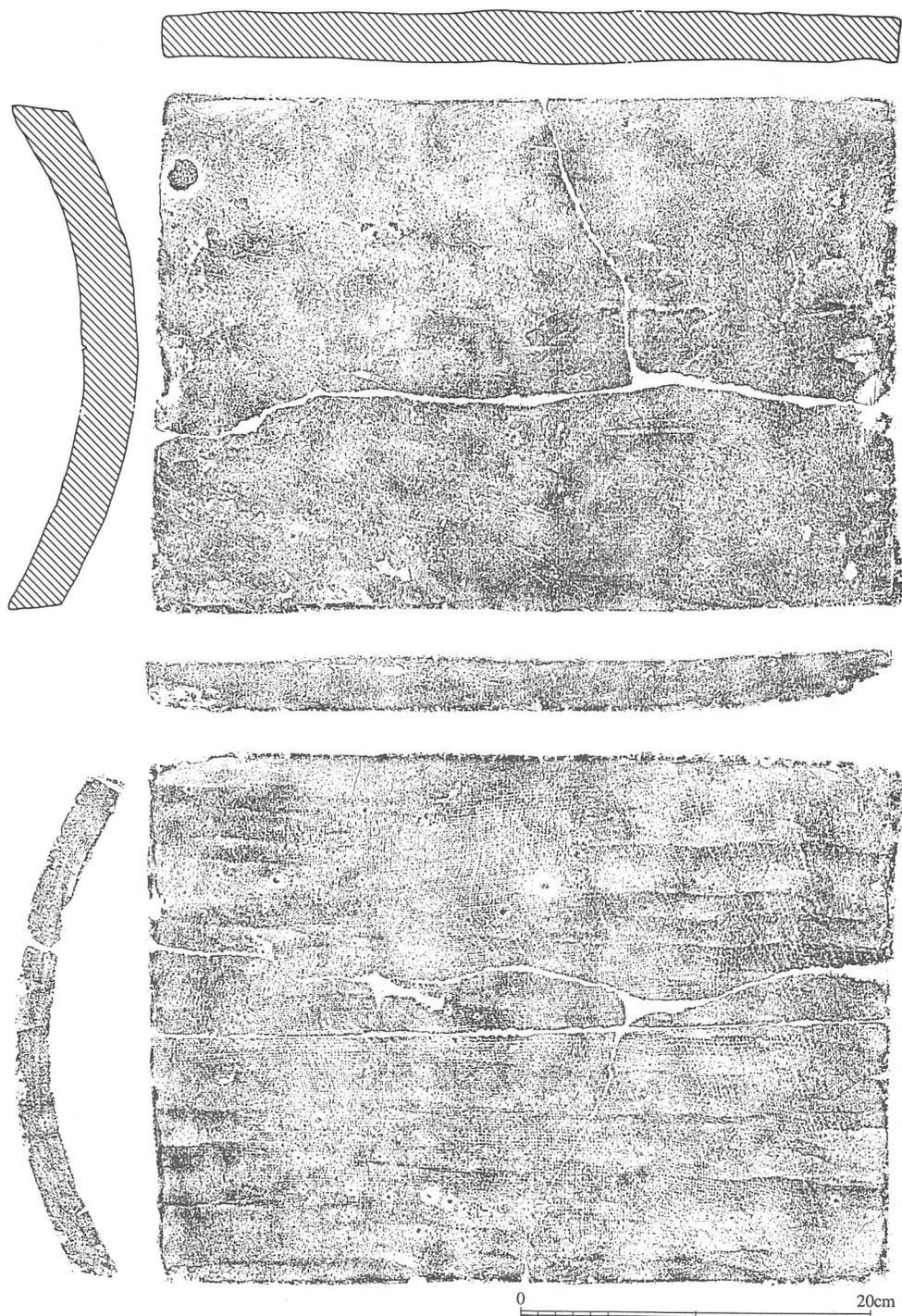


图12 21号窑第2次操業面出土熨斗瓦

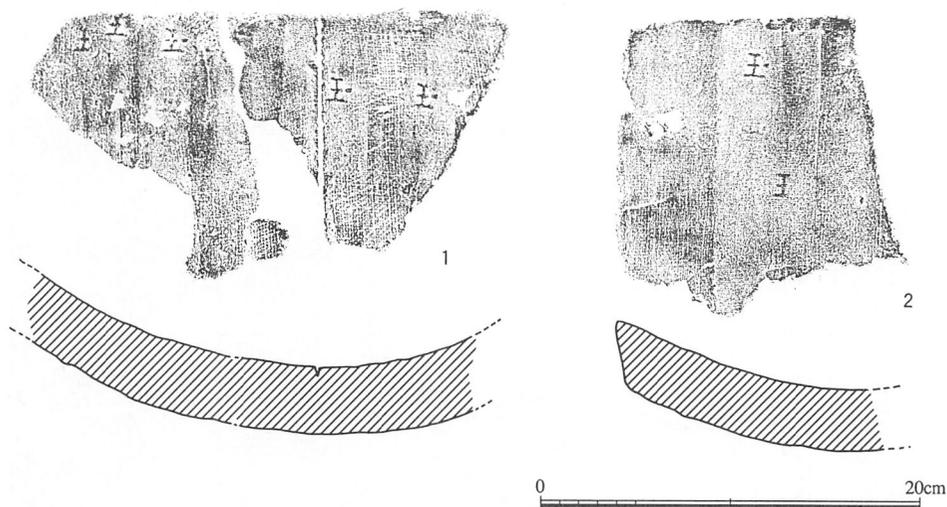


図13 「玉」銘熨斗瓦

#### 4 まとめ

栗栖野瓦窯が発見されて以来この小丘陵南端における窯跡の全容がしだいに明らかになりつつある。瓦窯では飛鳥・白鳳時代、平安時代の窯があり、須恵器窯、緑釉陶器の素地焼成窯がある。さらに今回は新たに二彩釉陶器焼成窯が発見され、その時代、窯構造、焼成品は多様である。

21号窯第1次操業面は遺存状態も良好で、その特殊な形態が今回明らかになった。半地下式窖窯で、燃烧部と焼成部の間に段を設け、焼成部の床面に瓦を敷きつめる。このような窯構造は、西賀茂窯・栗栖野窯に先行するとされる大阪府吹田市の岸部N1号窯<sup>註1</sup>と酷似する。ただN1号窯の場合は平瓦小片を不規則に敷くが、21号窯では半裁の熨斗瓦を計画的に並べ敷く違いがある。焼成部の傾斜は両窯とも約23度であり、傾斜は緩やかである。また両窯に共通する出土遺物には、緑釉の点滴がある焼台転用瓦、三叉トチン、緑釉陶器などがある。N1号窯については瓦陶兼業窯としている。上記の類似点からすると、21号窯でも焼成した可能性は高いが、瓦あるいは緑釉瓦を焼成したと断定する根拠は希薄で、窯施設としての熨斗瓦と焼台の瓦が出土した点以外は無。施釉前の陶器の1次焼成についても同じである。ただ、二彩釉陶器も含め緑釉陶器類を焼成したことは疑いの無いところであろう。問題点としては、焼成部に並べられた熨斗瓦の間に小さく割った瓦を据えて

いることで、これは傾斜面に製品を据える為の支えであると考えが、その機能と焼成品については検討を加えたい。また、敷かれた熨斗瓦には緑釉の点滴が極めて少ないことについては、操業回数が少ないためかサヤ等を使用したためかのいずれかが考えられる。

21号窯の第2次操業面では、焼成した製品の一部がそのまま投棄された状況で検出された。製品は須恵器の皿が大半で、他に杯や焼け歪んだ平瓶などがあり、多器種の須恵器を焼成していたことが分かる。また緑釉小壺が出土し、焼台の瓦には緑釉が多量に付着しており、第2次操業面でも緑釉陶器類を焼成したことが窺える。窯道具（トチン）が1点も検出されていないのは、最後に須恵器を主に焼成した為であろう。

今回発見の21～23号窯及び20号窯で焼成した製品を考えるうえで、崖下での2回の調査で出土したコンテナ10箱分の遺物も含めて検討する必要がある。須恵器では坏、皿、蓋、壺、甕、鉢があり、緑釉陶器では、緑釉陶器素地を含め碗、皿、杯、鍔釜、蓋、瓶、壺がある。二彩釉陶器では、瓶の高台部分、皿、小壺がある。瓦類では熨斗瓦、緑釉熨斗瓦、軒瓦、緑釉鴟尾がある。また窯道具ではトチン、ツク、輪トチがある。出土遺物の種類は多岐に及ぶが、それらの大半が4基の窯のいずれかで焼成された可能性は大きい。今回、多く出土した熨斗瓦は、特別の規格で作られており、平安宮などの限られた建物に使われるべき瓦であり、今後それらの建物も特定できよう。また「玉」字を刻印した熨斗瓦は今回が初見であり、平安京城の調査で出土例を待ちその意味解明を期したい。同じく二彩釉多口瓶についてもこれと同形のものは現在のところ平安京では出土例を見ない。ただ今回、東京都調布市教育委員会調査の上石原遺跡<sup>註2</sup>から出土したほぼ完形の多口瓶を実見できた。この遺構からは時期を推定する共伴遺物が無いと聞くが、その小注口の大きさ、器形が今回出土のものと極めて似ており、興味深い資料である。多彩釉陶については、施釉技法の伝達経路、奈良三彩との相違点などの解明が今後の課題である。

窯の操業時期は、出土した須恵器の形状から推定するなら、第2次操業面床面下出土の須恵器皿（図7-4）は、平安宮内裏SX4出土の須恵器皿<sup>註3</sup>と口縁端部の調整などが似ているが、口縁部立上がりにやや外反傾向がみられ、一形式降る時期に位置付けられよう。また、第2操業面出土の須恵器類は、平安京右京三条三坊SD19出土の須恵器皿、あるいは西寺跡SD1第2層出土の須恵器皿<sup>註5</sup>と器形や底部・口縁端部の調整が相似し、9世紀第1四半期に比定できよう。今回発見の窯は、出土遺物等から明らかに官窯と考えられるが、平安時代前期における窯の構築は、平安宮・京の造営にかかわる各官司の消長にも関わることであり、出土遺物と文献等を対比しさらに検討を加える必要がある。

- 註1 藤沢一夫、堀江門也『岸部瓦窯跡発掘調査概報』大阪府教育委員会 1968年
- 註2 調布市郷土博物館の学芸員・紀野自由氏が遺物を御持参、比較された。調布市上石原遺跡15地点S I—06出土。
- 註3 吉川義彦「内裏外郭跡」『昭和57年度平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所編・京都市文化観光局 1982年
- 註4 平尾政幸『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1990年
- 註5 堀内明博『昭和61年度平安京跡発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所編・京都市文化観光局 1987年

### III 栗栖野瓦窯跡の調査（その2）

#### 1 調査経過

調査地は、京都市左京区岩倉幡枝町611である。ここは、昭和60年度の発掘調査地<sup>註1</sup>（栗栖野瓦窯跡）の東側にあり、地形はわずかな平坦地が広がる畑地である。そこに建築計画の申請があり、京都市埋蔵文化財センターが事前の試掘調査を実施した所、平安後期の瓦を含む土壌や落込みのあることが判明した。そこで京都市埋蔵文化財調査センター・当研究所・原因者・設計業者とが協議を行った。その結果、早期に発掘調査を実施することとなった。調査対象地には、大きな柿の木や作業小屋があり、それらをすべて撤去の後に調査に取りかかった。地形は東側に1.5m落ちる段があり、調査地西側を削って東側に埋め返した土地であると思われた。なお、周囲は住宅地に囲まれているため、十分な安全柵を設置した。

表土については機械力で掘削し、場外に搬出した。トレンチは、敷地の地形に合わせて、申請された建物範囲はできるだけ調査できるように設定した。又、旧地形を確認できるかたちにA～Eのトレンチを配置した。

#### 2 遺 構

調査区は、まず調査対象地中央に設定し、遺構の広がりを追うかたちに拡張区を設け、それを北よりA～Eトレンチと付けた。発見した遺構は、平安時代前期の落ち込みが最も古く、平安時代後期の土壌、室町時代の溝、江戸時代以降のゴミ穴等がある。以下に時期の古い順に記述する。

##### 平安時代前期

**落込み** 調査区南端のDトレンチで検出した不整形な落込みである。埋土は暗褐色砂泥層で、なかに若干の炭を含む。土師器、須恵器、瓦等が出土。

##### 平安時代後期

**SK13** 調査区の東端でその西肩部を検出。肩口ラインは不整形である。東西4m以上、南北6m以上、深さは1mで、底部はほぼ平坦である。地山の明オリープ色砂泥層を切り込んで掘られていたが、断面形状が袋状を呈する。それは同層下に厚さ0.5～1mの白色粘

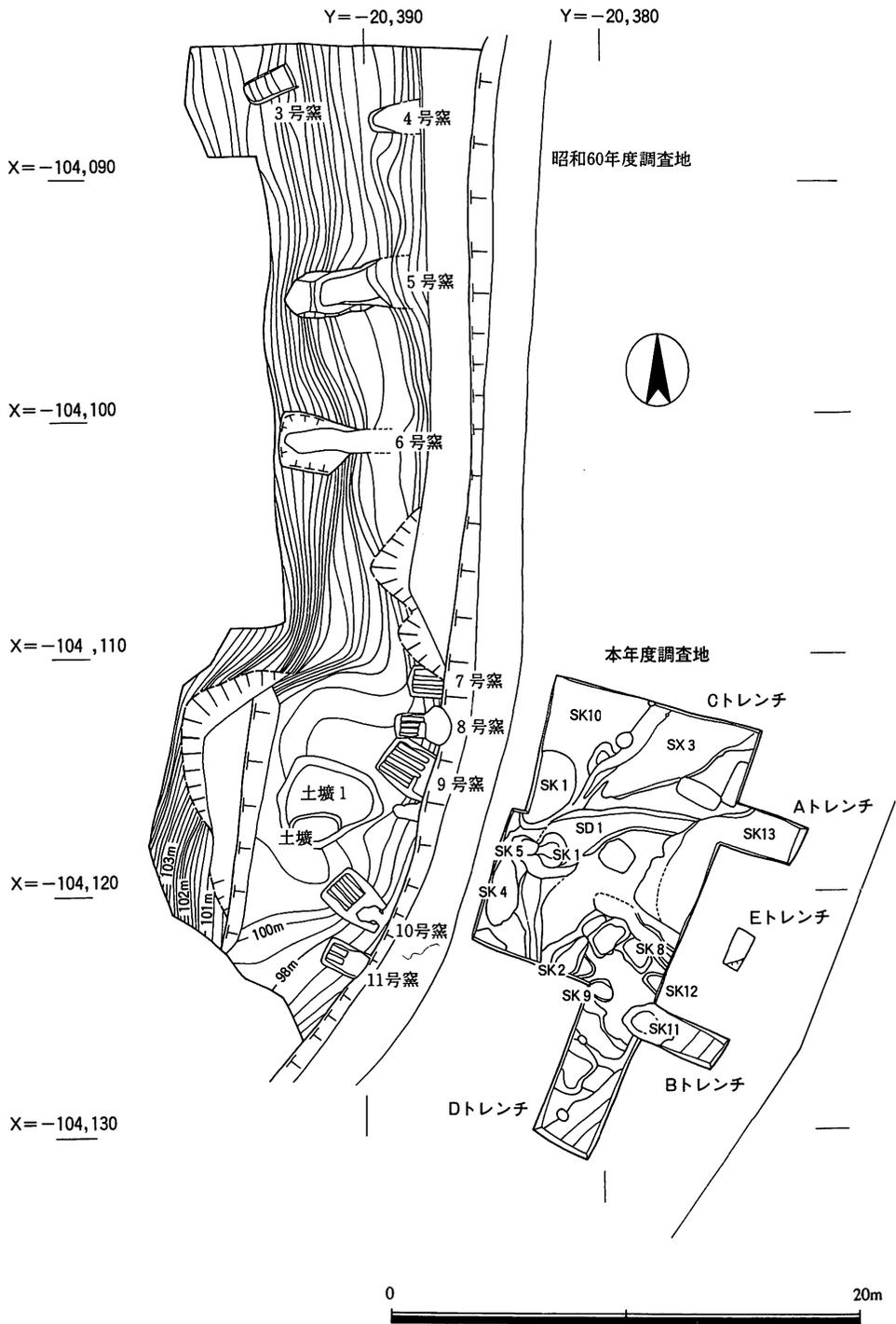


図14 遺構配置図 (1/300)

土層があり、これを採掘した結果であろう。土壌内には、平安時代後期の軒丸・軒平瓦が入っていることから、少なくとも平安時代後期頃の瓦の埴土を取る穴であると考えられる。

**S X 3** 調査区の北東角から、南西に向け舌状に延びる。検出長約9 m、北東端での最大幅3.5 m。底部は旧地形に沿って北東に向けて傾斜する。遺構内堆積土は大きく3層に分けられ、各層の下部には石、瓦、土器が敷かれる。上層である第1層下部では、主に平安時代前期の瓦を踏石状に敷き詰めており、第2層では、中国磁器や白色土器片が多く見られた。第3層は、土器量が最も多く、平安時代前期・後期の瓦・土師器・須恵器等が堅く叩き絞められた状態で検出された。さらにこれを取り除いた下層には、土取り穴状の遺構が検出された。上記第1層から出土した瓦器は、13世紀前半と考えられ、最下層の出土遺物は、12世紀初めのものが最も新しい。調査区西の丘陵で発見された瓦窯跡<sup>註2</sup>とS X 3の位置関係や形状を考えると、S X 3は、その窯に登る作業道であることが推測できる。この道は、丘陵斜面の粘土層を切り込んで作られているため滑りやすく、付近にあった灰原の遺物を敷き詰めることで道の安定をはかったものと思われる。

**S K 2** Cトレンチ南端部で、厚さ20 cmの畑土直下で検出した。南北に長い不整形な土壌で、検出長6 m、最大幅1.5 mである。平安時代後期の瓦が多く出土したが、土器類が少なく、いつの時代に埋められたかは判断できなかった。

**S K 11** Bトレンチで検出。径が約1.5 mの不整形円形である。12世紀前半の土師器皿と白色土器が出土。

#### 室町時代

**S D 1** Cトレンチ南端から北に約5 m延び、さらに東に向けてL字状に回り込む溝である。中央部での最大幅1.2 m、東端部での深さ0.5 mで、南側に浅く、東に向けて深くなっている。溝がL字状に曲がる部分に、径が20 cm大の石が多数敷き詰められており、水の調節をする為の施設であると思われる。溝内からの出土遺物の大半は、平安時代後期の瓦であったが、なかに室町時代の土師器皿を含む。

#### 江戸時代

**S X 1** S D 1を切り込んだ土壌である。平安時代の遺物を多量に包含するが、最下層より室町時代後半の土師器皿が出土した。試掘時に確認した瓦を含む土壌である。おそらく江戸期に平安時代の瓦を投棄するために掘られた土壌、あるいは野井戸であろう。

近代に属する土壌にはS K 1～5、S K 10がある。いずれもゴミ処理のために掘られた穴と考える。

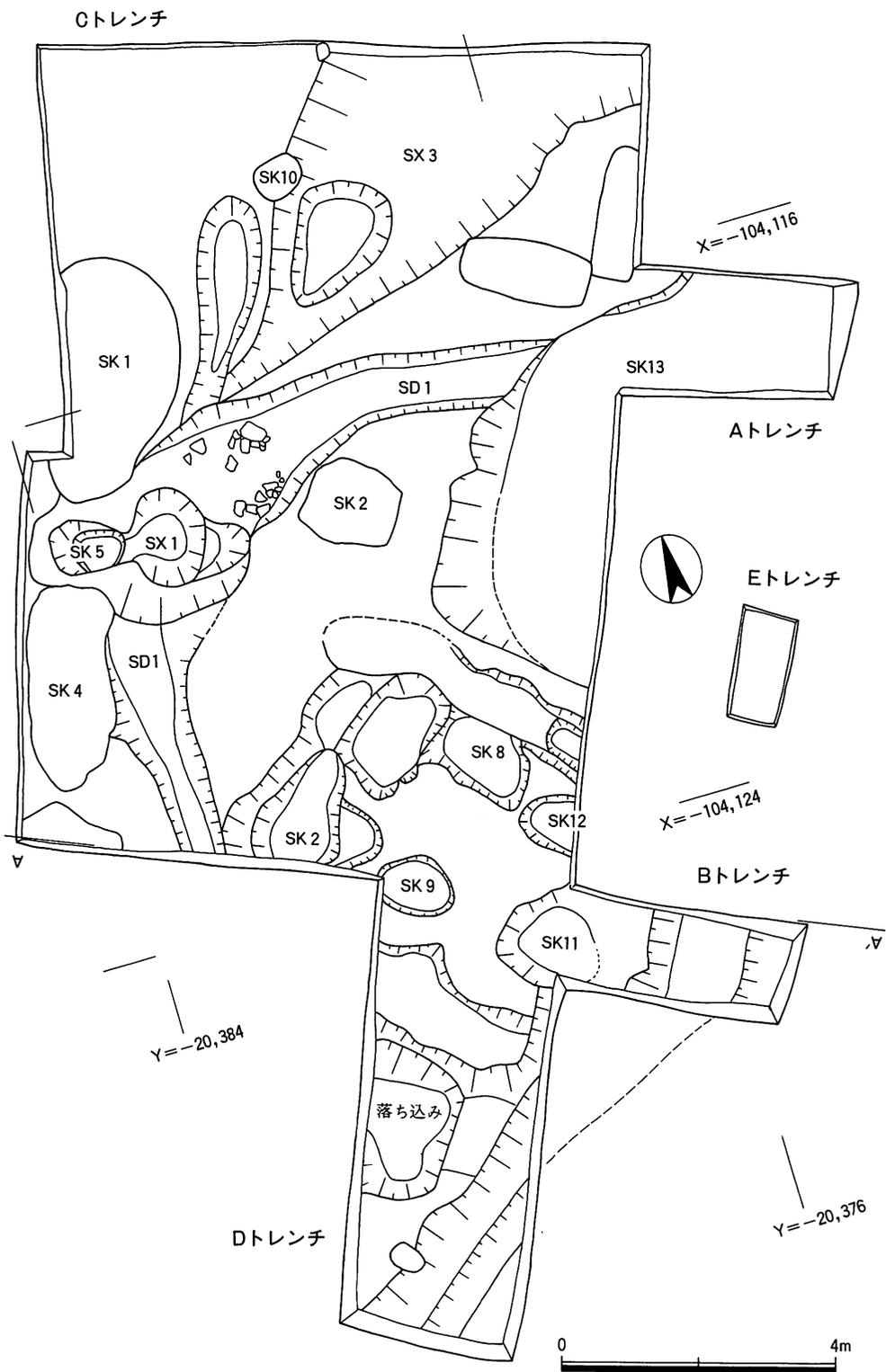


図15 遺構実測図

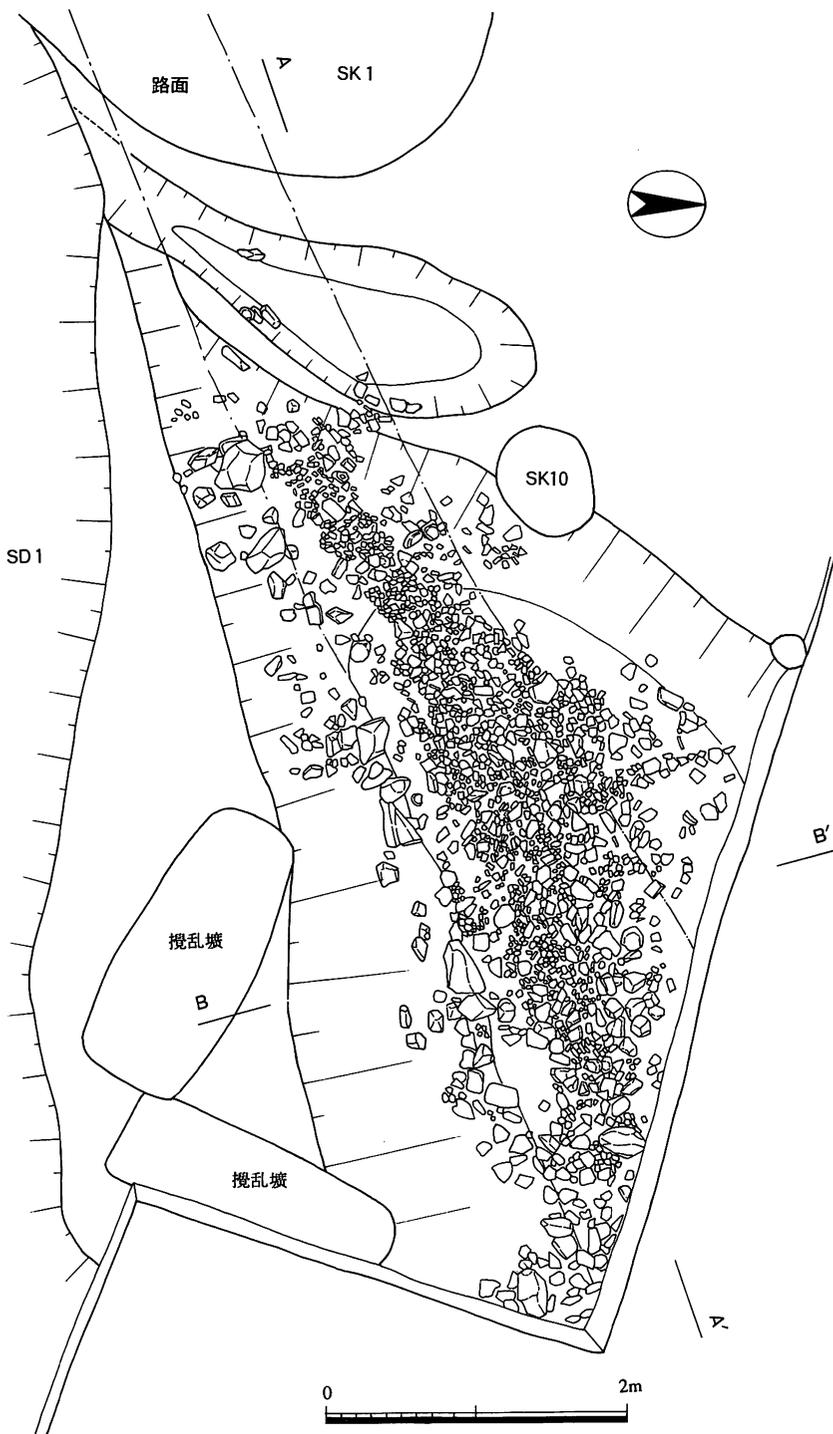


图16 SX 3 实测图

B, Cトレンチ断面図

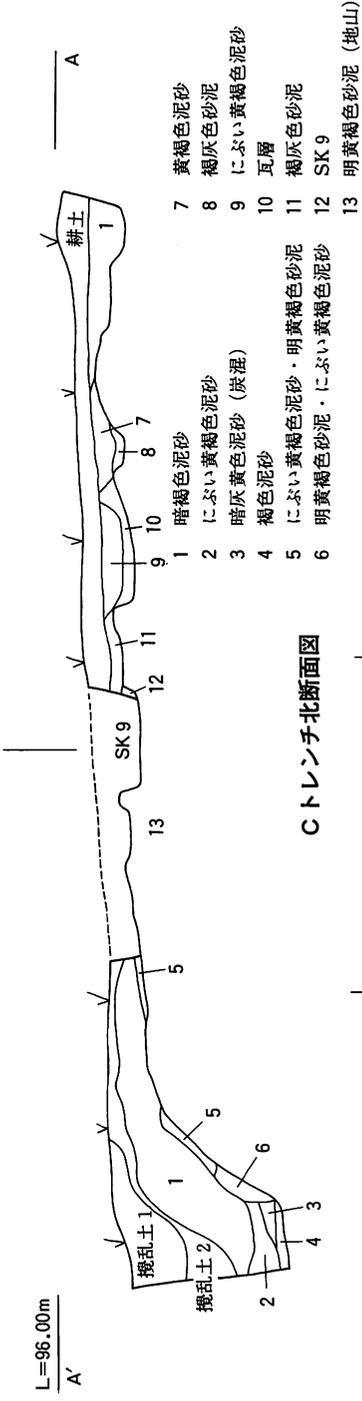
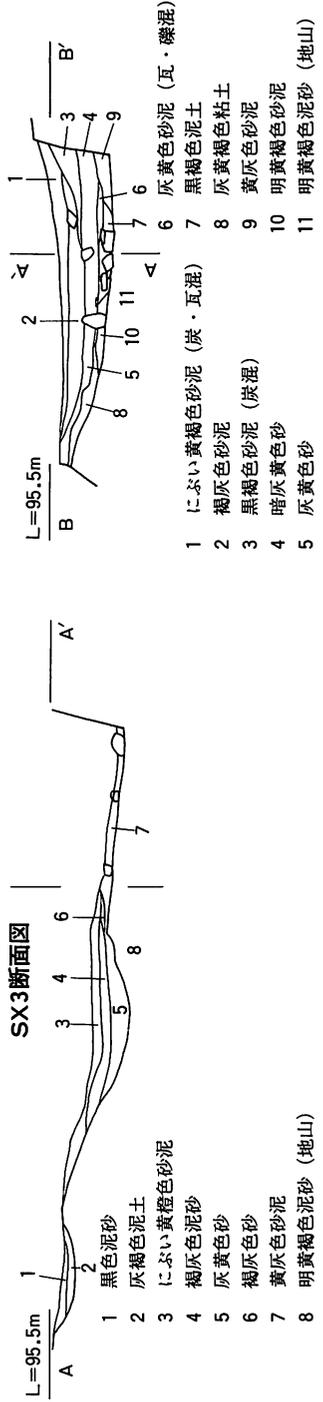


図17 地層断面図 (1/80)

SX3断面図



### 3 遺物

遺物は、純粋な一括資料のかたちでは発見されておらず、2次・3次の移動を受けているため各時代の遺物が混在する状態であった。出土遺物のほとんどは、灰原等に廃棄されたと考えられる窯跡の製品であり、一部ここで生活した人々の使用した遺物も含まれている。遺物の大半はSX3より出土しており、他の遺構からの出土量は少ない。以下、土器類はなるべく遺構別に、瓦類は時代順に概説する。

#### 土器類 (SX3)

須恵器 (図18) の遺物は、TK208<sup>註3</sup> (5世紀後半) の須恵器杯2・蓋1に含まれる。1・2 (図19) は底部へラ切りの杯と皿である。16は高杯、17は平瓶で、口縁部と把手が欠失する。18・19は壺型になる。3は段皿で内外ともにナデ仕上げである。4は椀で、ミガキは行っていない。5は、4の底部であると思われる。13~15は、ロクロ目を外面に残したまま、調整を加えない。底部は静止糸切りと回転糸切りの2種がある。小塩産の皿の祖型となったものである。21~33は、輪高台のグループであるが、成形技術は一定していない。21のように底部を水平になるまで削り込んでいるものや、22・23のように、高台付近のみ削り込むもので糸切痕を残しているものなどがある。25 (図20) は、輪花椀で、体部がやや外にふくらむ。27の体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。28~30は、底部を浅く削り出す椀である。内面にミガキを施す28・29と、そうでない30がある。31は、体部が腰折になるもので、へラミガキが認められる。32は、内面にへラミガキと二条の沈線が見られる。33は、底部をケズり出した時に中心部を削り残している。34~42は、蛇ノ目高台であるが、成形技術が一定しておらず、深く削り込む39・40と浅く削る35~38の2種がある。内面は、いずれもミガキを施す。沈線は一条と二条とがある。

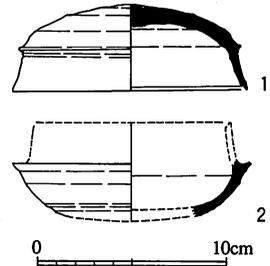


図18 古墳時代遺物

緑釉陶器 (図19) 6~12 6は稜皿である。全面に緑釉がかかり、底部は削り出し輪高台である。7は内面にミガキが施され、軟質の胎土に全面施釉されている。高台は、ケズり出しである。8は底部に施釉されていない。胎土は須恵質で、釉調はやや濃い緑色である。9は内面にミガキが施され、一条の沈線が入る。底部は、削り出しの蛇ノ目高台であり、胎土は赤黄色を呈する。釉調は淡い緑色である。10は須恵質の胎土の上に薄く釉をかける。釉調は、濃緑色を呈する。11の胎土は白く須恵質で堅い。内面に一条の沈線、底部は静止

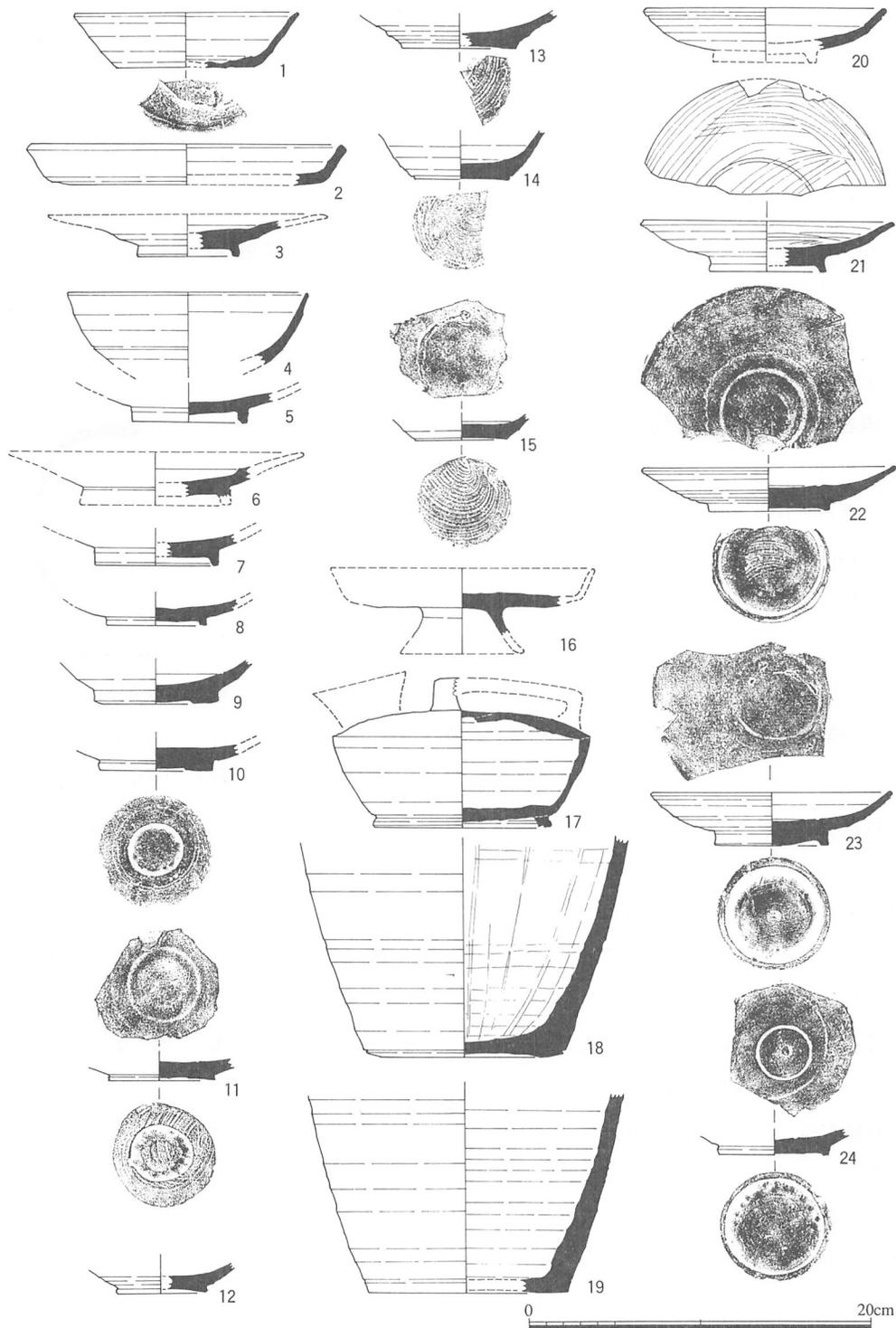


图19 SX 3 出土土器

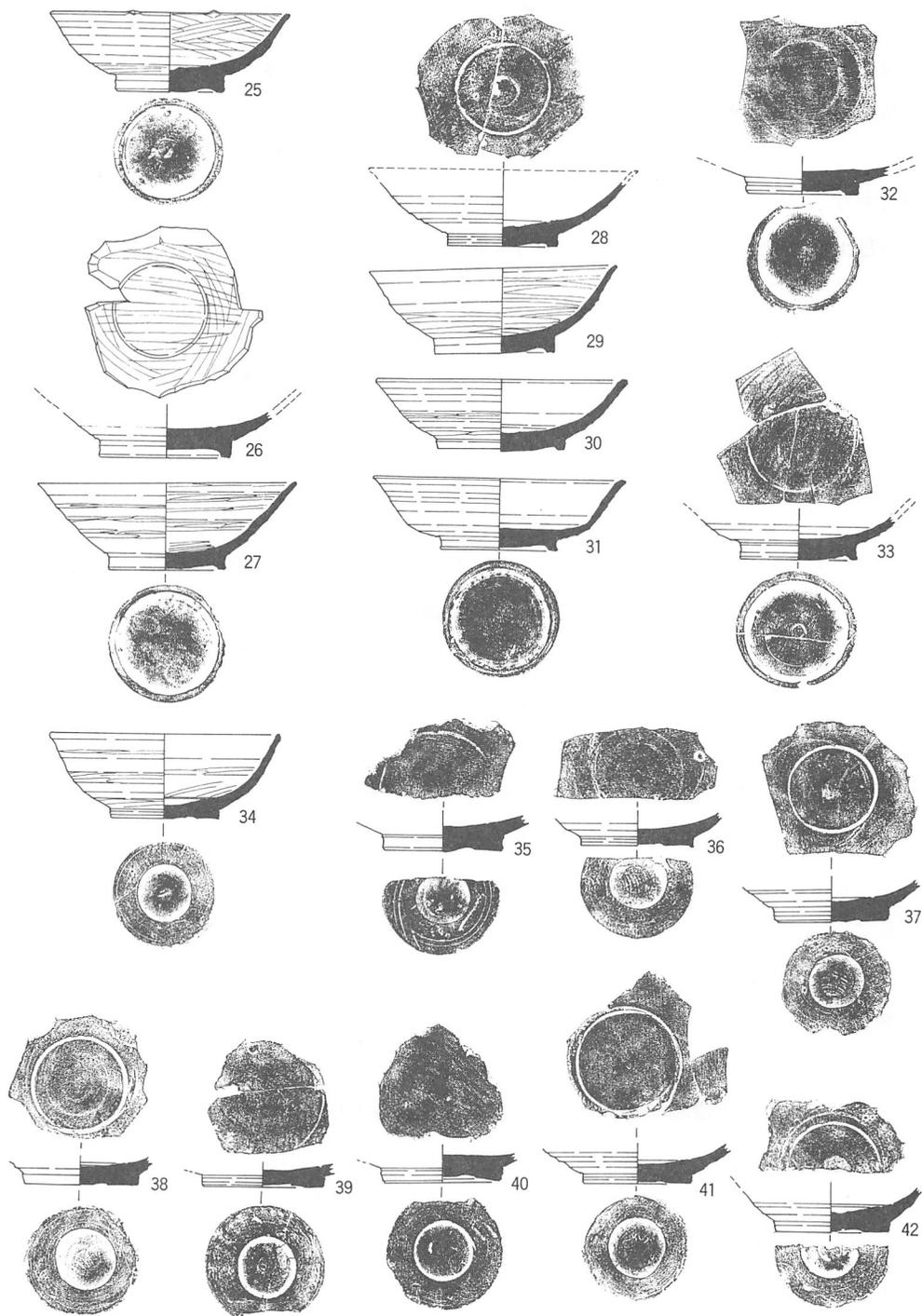


图20 SX 3 出土土器

糸切りした後に軽く削り出している。釉調は明緑色で、全面施釉されている。12は底部が弧状に凹む高台である。白い須恵質の胎土に、うすい緑釉がかかる。86～88は重ね焼きの須恵器で二固体の蛇ノ目高台の椀が重なる。89は蛇ノ目高台と輪高台の椀が重なっている例である。

**白色土器**(図21)43～88 緑釉の素地とは異なり、全体に土器の内外面にはミガキが見られず、ロクロ引き上げ痕をそのまま残している。底部は、糸切りしているが、静止糸切りと、回転糸切りがある。底の厚さも多様である。小皿43～55は、口径9～10cmである。体部が内に折れて立ち上がるものと外反するものと2種類ある。大皿61～63は、口径15～16cmあり、体部の中央で緩やかに内に屈曲する。小椀56・57は、口径13cmで、成形後、回転糸切りのままである。椀58・59・61は、口径13～15cmある。底部の厚いもの、薄いものの2種あり、静止糸切りである。高杯65・66は、口径18cmの杯部を糸切りの後に、脚部を接合していることが、剝離面より観察できる。椀67・68は、回転糸切りした後、高台を貼りつけている。68は、暗褐色を呈している。70は皿で、体部が直線的に広がる。内面に二条の沈線がある。71は、表面が赤色塗彩されている。72は、回転糸切りされた底部で、褐色を呈する。73は、輪高台を持つ大きな器形で、褐色を呈する。

#### その他の土器

**土師器**(図21)74～77 手づくねであり、SX3の上層より出土している。

**瓦器**(図21・22)78・111 小片であるが、楠葉型(大阪府枚方市)であろう。

**白磁椀**(図22)79～83・79・80は、口縁端部がやや外反し、81は内湾する。82は白磁椀<sup>註4</sup>V類で、83はIV類に入る。

**瓦塔**84 瓦質で、九輪部の破片である。

**窯道具**85 いわゆるツクで、筒状部は中空になっている。赤褐色を呈する。ここでは、三叉トチンの小片も出土している。

**その他の遺構出土遺物**(図22)89以下は、SX3以外より出土した土器類である。D区落ち込みの遺物は、89・91～94・97である。いずれも平安時代前期に属している。90・95・96は隣のBトレンチとの境で発見した白色土器である。SK11からは98～103が出土した。12世紀の土師器皿と白色土器が共伴している。SX1には104～108が混在していた。SD1からは、109・110が出土した。SX2からは、削り出し高台が浅く斜めに切られた白磁椀IV類112が出土している。

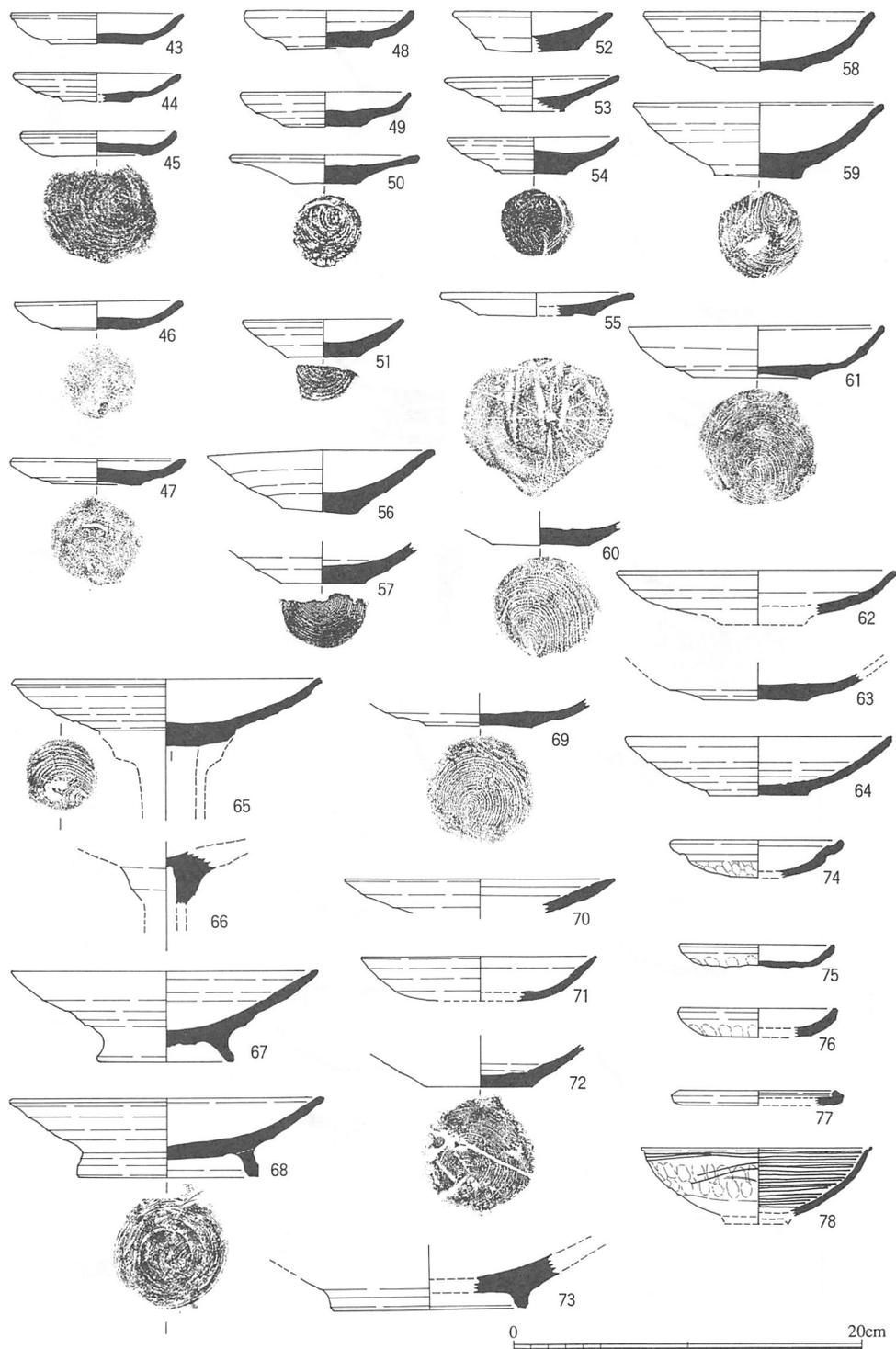


图21 SX 3 出土土器

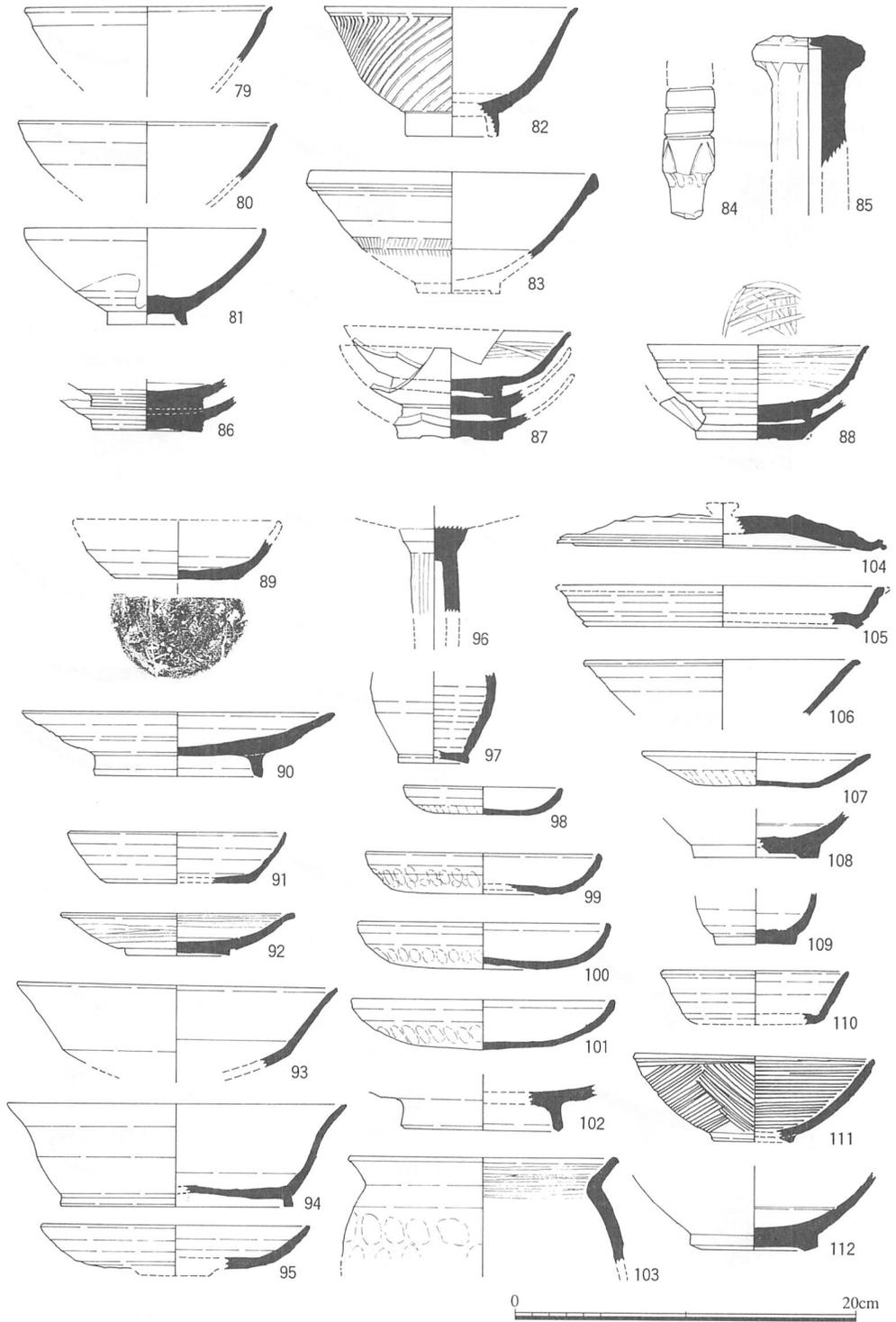


図22 SX 3 その他の遺構出土土器

## 瓦 類

出土地点は表1に列記してあるので、ここでは時代別、種類別の分類に従って概説する。

**軒丸瓦**(図23) 1～12までは平安時代前期である。1～6は、単弁蓮華文軒丸瓦で、緑釉瓦は4のみであった。胎土は粗い砂質である。7・11は、花卉が二重になる複弁蓮華文軒丸瓦である。8～10は、複弁蓮華文軒丸瓦で複弁の間の界線が入っていない。13は平安時代中期に属し、外区に唐草文様がめぐる。上半部に筈傷が認められ、筈の磨滅が進行している。14以下は平安時代後期に入るものである。14・15は、単弁の蓮華文軒丸瓦で、軟い多孔質である。16は、中房が大きくなったため内区の複弁部が狭い。しかし珠文は大きい。17～20は、八葉単弁蓮華文軒丸瓦であり、蓮子の数が1+3、1+4の2種がある。21～23(図24)は、複弁蓮華文軒丸瓦で、蓮子の数が1+4、1+6、1+8の違いがある。複弁部は、筈の磨滅のため不鮮明である。24は、単弁蓮華文軒丸瓦で外区が省略されている。25は、線のみ蓮華文で、花卉が不鮮明である。26・27は、九弁蓮華文軒丸瓦で、蓮子は1個である。弁間文は、点で表現されている。28以下64まで(図24・25)は、すべて右巻三巴文軒丸瓦である。外区に珠文が無いものと有るもの、巴文の中心点が連結しているものと離れているもの、巴文の尾部が接しているものと離れているものがある。そのうち52・55・57は、筈傷が中央部に見られる。

**軒平瓦** 平安時代前期に属するのは、65～68(図26)で、均整唐草文軒平瓦である。平安時代中期は67～79に属する扁行唐草文軒平瓦である。後期80～88の扁行唐草文軒平瓦(図26)は、文様部と平瓦部の関係は半折り曲げを行なった後粘土を加えて文様部を作っている。89～95は、唐草文軒平瓦で、唐草の線が細く文様区の幅がせまい。96は、退化した唐草文である。97・98は半裁花文軒平瓦である。99～104(図27)は、変形した唐草文軒平瓦である。105は、完全折り曲げで、布目は細く、そのほとんどが消されている。鎌倉時代に入るものと思われる。106は、花文軒平瓦である。107は、幾何学文軒平瓦で、どのような文様が退化したものか不明である。108～112は、巴文半裁花文軒平瓦で、雁金文のように見えるのは、半裁花文が退化した結果である。114～116は、蓮花文で花卉が一重ものと、重弁になっている二種が見られる。117～125は、剣頭文巴文軒平瓦で中心に1個巴文が入るものと相互に入る2種がある。126以下は、剣頭文軒平瓦で、数量が多く、文様に小さな違いがある。139は、筈割れしたものを使用しつづけている例である。

代表的な軒瓦について断面図(図29)を掲載した。軒丸瓦の1・7は瓦当部が厚く、大きいものである。13は、一本造りで接合していない。それ以外の断面は、平安時代後期の

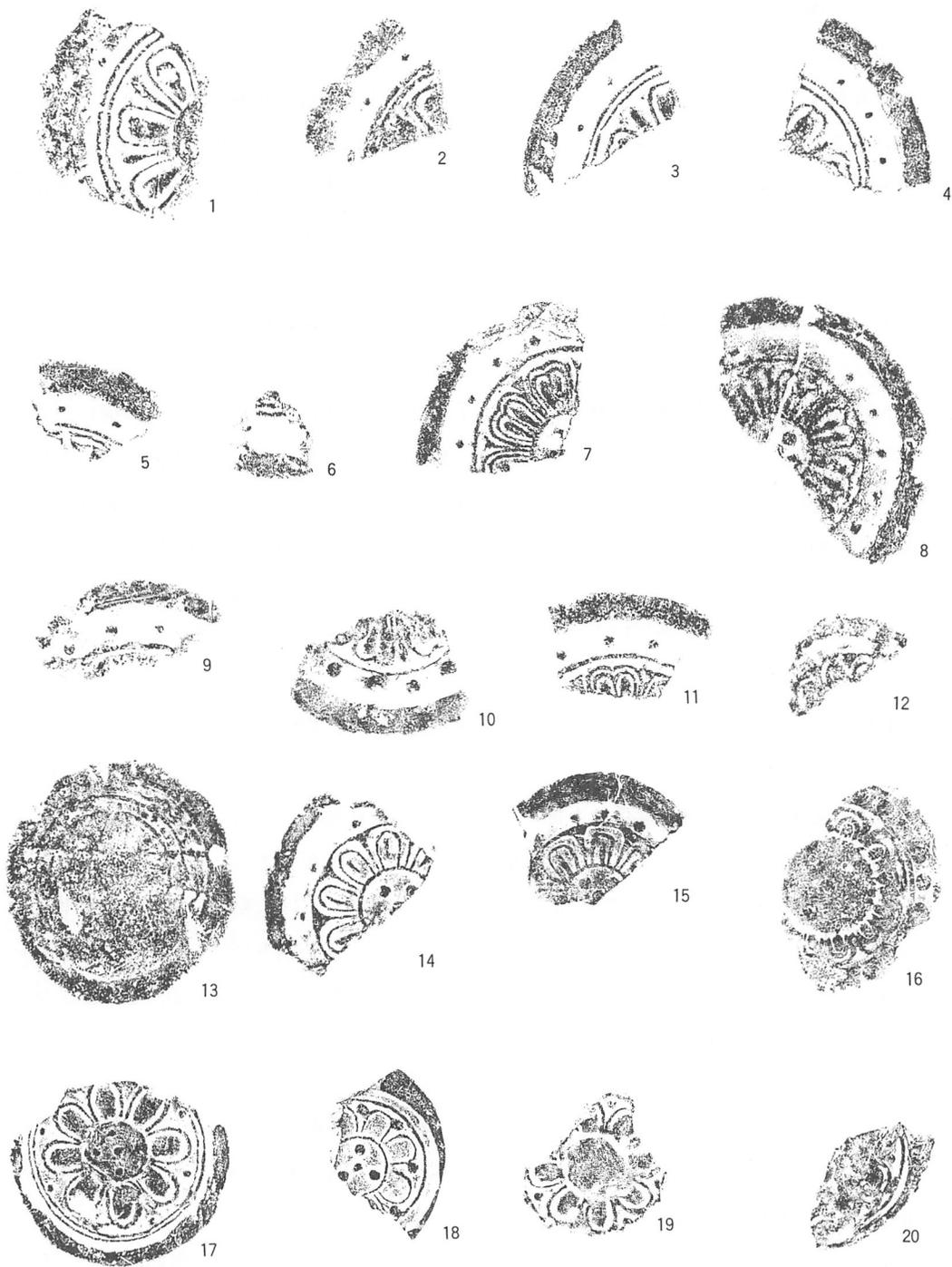


图23 出土軒丸瓦 (1/4)



图24 出土軒瓦 (1/4)



图25 出土軒瓦 (1/4)

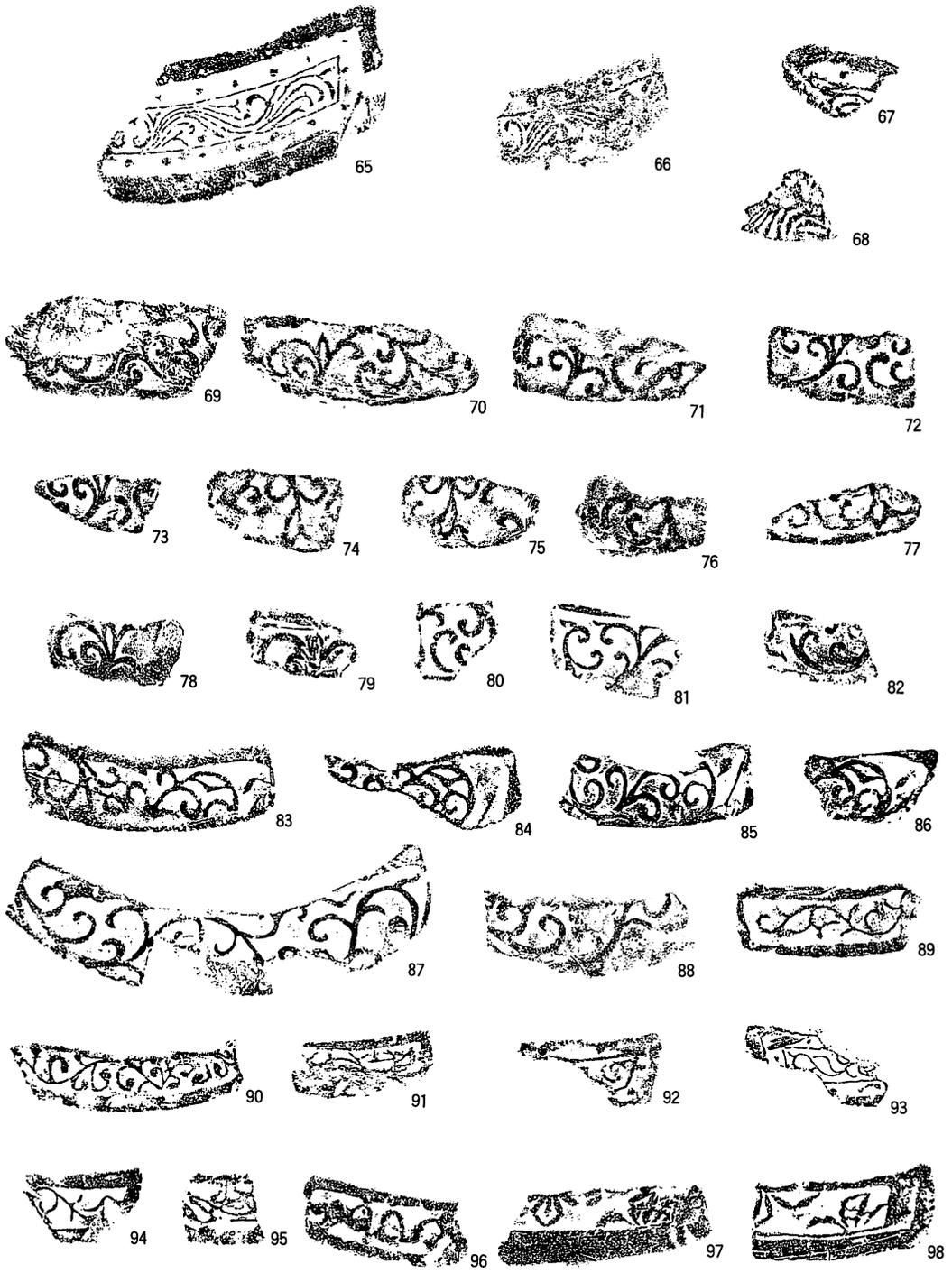


图26 出土軒平瓦 (1/4)

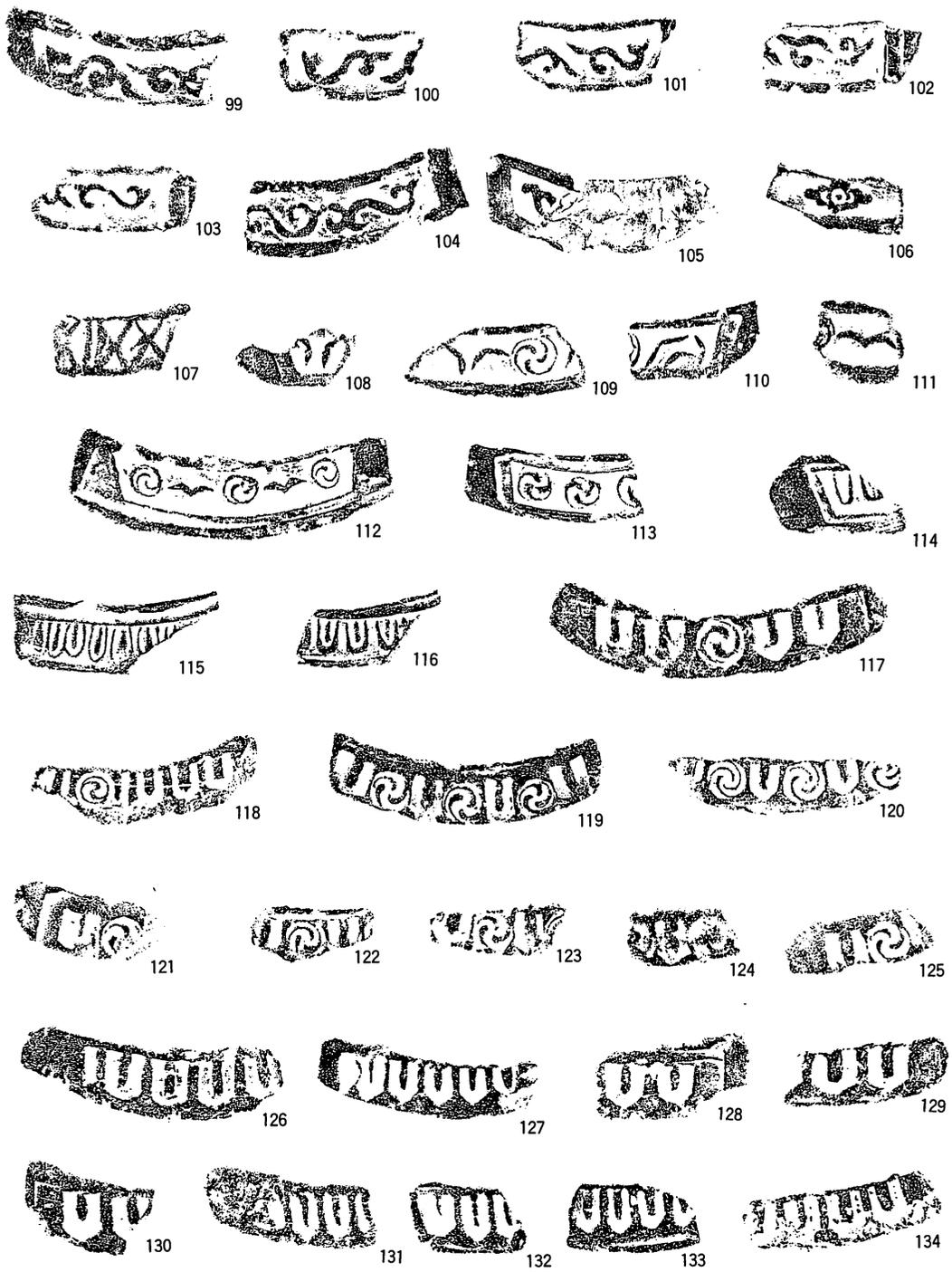


图27 出土軒平瓦 (1/4)

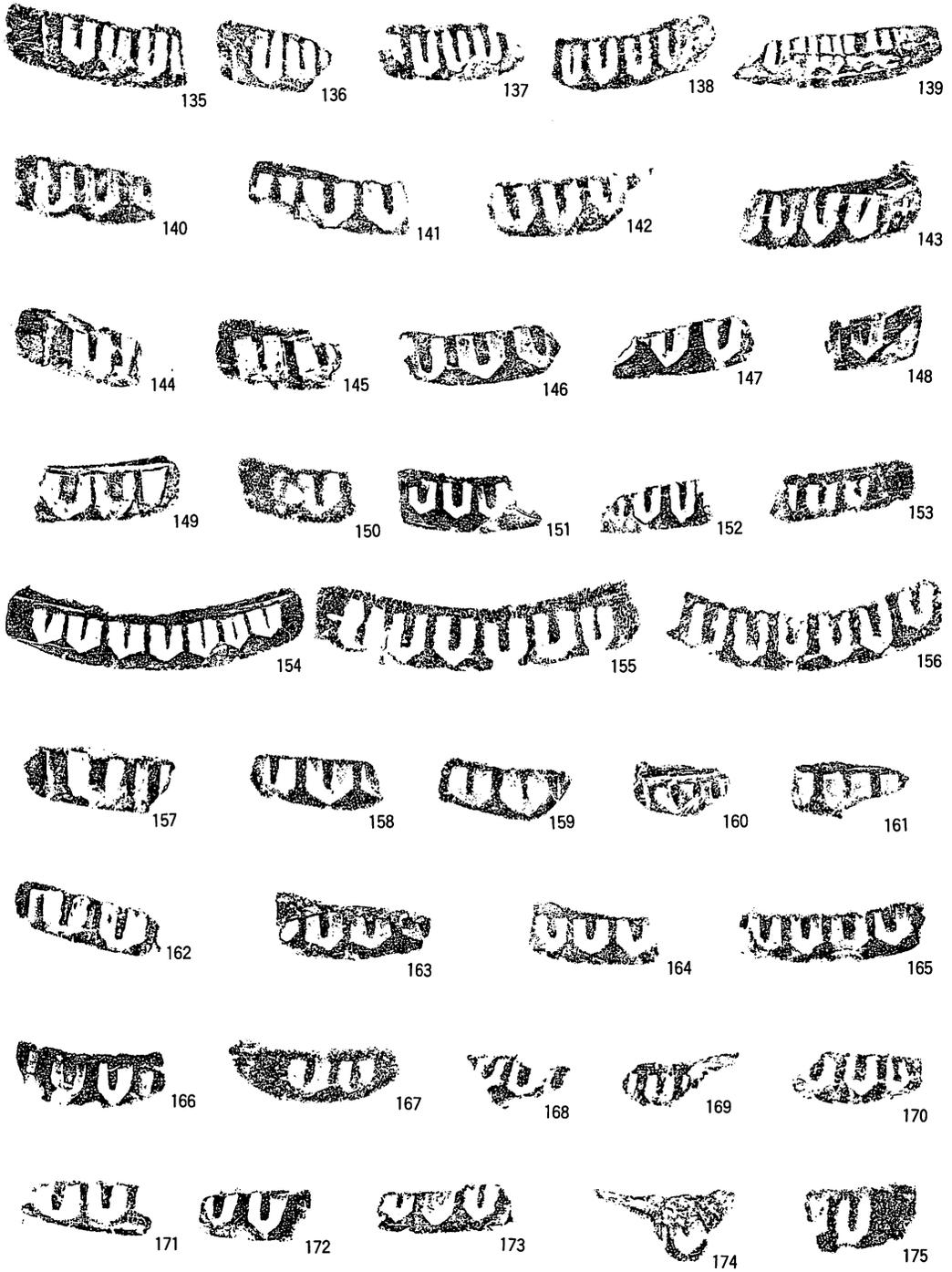


图28 出土軒平瓦 (1/4)

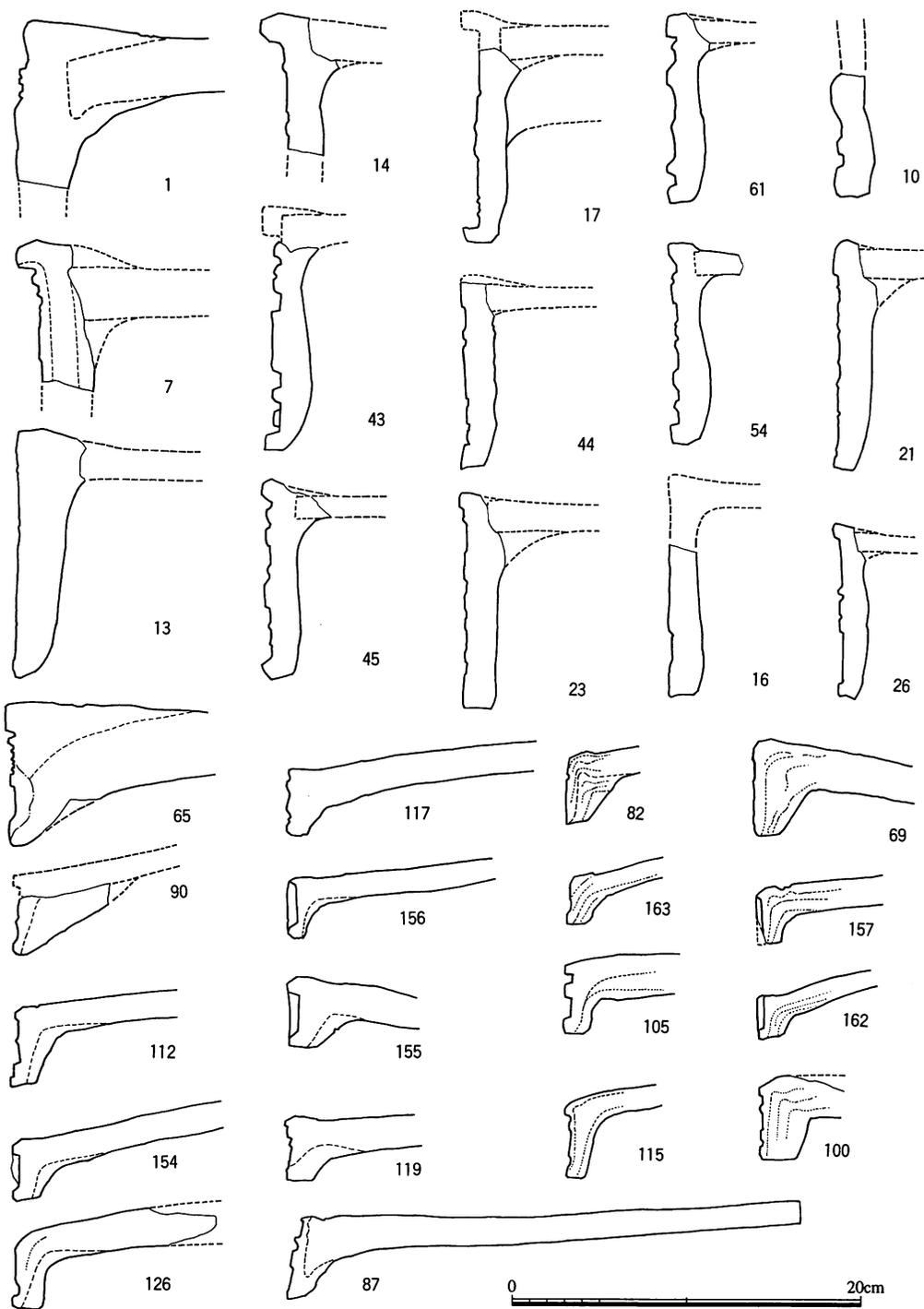


图29 軒丸·軒平瓦断面图

瓦で接合部は浅いものが多い。軒平瓦の65は、平安時代前期に属し、接合しないで一体造りの顎を持っている。90は顎部の張り付けが脱落したものである。完全折り曲げ技法は、75・105・100・162に見られる。それ以外はすべて半折り曲げ技法である。その特徴は、少し折り曲げた後に粘土を追加し、文様部を形作っているところである。

**銘瓦・記号瓦** 平瓦（図30）は、凹部に「木工」銘が見える。これは瓦型に陰刻されていたことを示すものである。凸部は、きれいな縄目の叩きである。平安時代中期に属している。へら記号瓦（図31）は、いずれも平安時代後期の瓦にへら描きされているもので、27・176は、軒丸瓦の筒部凸面に

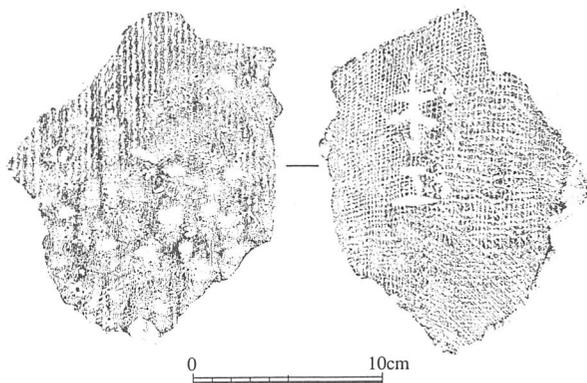


図30 「木工」銘平瓦

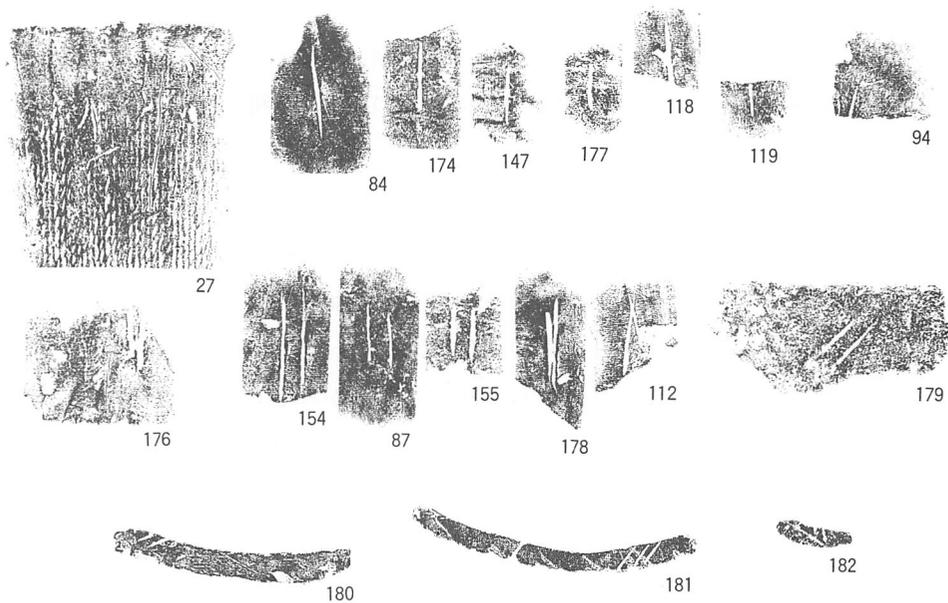


図31 瓦へら記号 (1/4)

「ハ」の字状に描かれている。84・147・174・177・118・119は軒平瓦の凸部に「|」縦一本線が引かれている。同様に158・87・155は「||」の二本線、178・112は「x」と少しクロスしている。179は、平瓦の凸面に「//」があり、180の奥短面にも「//」がある。181には「///」が、182には「x」が描かれている。いずれも個人を表す記号であると思われる。

**緑釉熨斗瓦**(図版20-1) いずれも端面に明るい緑釉のかかるもので、本書に掲載の22号窯出土のものと同ーである。

**瓦塼**(図版20-2) いずれの瓦塼も径1cm前後の穴を貫通させているもので、全体を復元できるものはなかった。その内一辺の長さの分かるものは2点で、18cmある。厚さは4.2cm~5.2cmあり一定していない。片方の広い面に板状の痕跡が認められる。

#### 4 まとめ

遺構では、埴土取りの穴と思われるSK13を発見したことは重要であった。この穴は、白色粘土を採る目的で掘り込んでいるため、砂層に至ると掘りやめて、袋状になっている。白色粘土層は、0.5m~1mの厚さである。穴には大小があって、大はSK13、小はSX3下層・SX2・Dトレンチ落ち込みである。

SX3は、作業用の道と考えられ、7~11号窯跡<sup>註5</sup>(図14)に延びているためである。平安後期に瓦の需要が急増した時に作られ、付近の灰原の廃棄品を利用して何回かの地堅めを行っている。

遺物についても新たな発見がある。5世紀後半の須恵器のあったことは、丘陵上に古墳があった可能性を示している。7世紀以降8世紀中頃までの遺物は、平安京遷都以前の窯業生産遺跡の存在を示している。9世紀に緑釉瓦生産が開始されると同時に緑釉陶器生産も始まると見え、多くの緑釉陶器用(素地)が発見できた。また洛北産緑釉陶器が、軟質系であるのに対して、須恵質のものが意外に多いことが分かった。瓦は飛鳥時代から鎌倉時代までの製品が出土した。中でも栗栖野瓦窯で発見した(図32)『上』銘軒平瓦は、上ノ庄田瓦窯の同銘瓦<sup>註7</sup>と一致し、瓦範が一方へ移動したことを示していると思われる。この文字は、従来不鮮明で、「土」とも「上」とも読まれていたが、今回は『上』を「上」と読むことができた。平安時代後期の瓦類も多数発見でき、これが先の昭和60年度調査と密接な

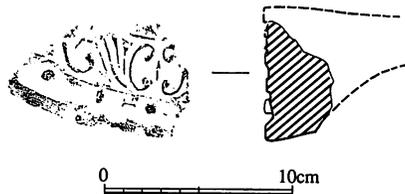


図32 「上」銘軒平瓦

関係にあったことが分かった。瓦の種類においても新発見があったので(表1)に示しておいた。軒平瓦を見てみると、ほとんどが半折り曲げ瓦であり、完全折り曲げは少ないという事実が分かったことも重要である。さらに、一部鎌倉時代に入る折り曲げ式瓦があることも確認できた。土器については、白色土器の発見がある。それも生産地での発見であった点は重要である。これは、同時期の南庄田<sup>註8</sup>瓦窯ですでに多数確認されている。同様の出土例が近い場所にあるとするなら、瓦窯と密接な関係を持った製品であることが窺える。そこで考えられるのが『執政所抄』<sup>註9</sup>の内容である。特に「栗栖野様器」については、土器の生産地名を示すものであることが、他の「深草様器」・「春日器」などからも言える。「様器」に、三寸・五寸と大きさを示すもの、「土高坏」と「高坏」が存在すること、『抄』の成立年代が1136～1149年頃であるから、記載内容は、12世紀中頃となり、瓦生産の時期と矛盾しない。「栗栖野様器」は、大・小の皿、椀・高坏もあつて、栗栖野で生産されていた土器と言うことになり、今回発見の白色土器と一致する。その消費地区が、天皇家・摂関家宅地周辺に限定されている点からしても、特定の使用のためだけに生産されていたとも言える。

今回は、小面積にもかかわらず、多くの資料を得ることができた。特に出土遺物からは極めて重要な成果が得られた。それは、窯本体に限らず、窯跡周辺の遺構や灰原等から得られる資料の重要性を再認識させる結果となった。

註1 北田栄造・長谷川行孝『昭和60年度 栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』(財)京都市埋蔵文化財研究所編・京都市文化観光局 1986年

註2 (註1)に同じ。

註3 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年

註4 森田勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館普及会 1978年

註5 (註1)をもとに座標設定した後、一部改変し、再トレースした。

註6 高橋照彦氏によると(『岩倉古窯跡群』京都大学考古学研究会1992年)、この期間にも須恵器は、少量生産されていた。同時に瓦生産も確認されている。

註7 (財)京都市埋蔵文化財研究所『坂東善平収蔵品目録』1980年 p.46—310による。大宮・河上瓦屋跡出土としている。

註8 高正龍氏、小森俊寛氏の御教示による。

註9 「執政所抄」『続群書従』第十輯上 続群書類従完成会 1974年

表1 出土瓦一覧表

図No.	器種・器形	遺構名	文1との同范・同文関係	他の遺跡同范・同文関係等	
1	単弁蓮華文軒丸瓦	S X 3 肩部	図21-4	文2-28・29	
2	単弁蓮華文軒丸瓦	S D 1 B断面			
3	単弁蓮華文軒丸瓦	S X 3 下層			
4	単弁蓮華文軒丸瓦	S X 3			
5	軒丸瓦	S D 1			
6	緑釉軒丸瓦	S X 1 上面			
7	複弁蓮華文軒丸瓦	S K 5			
8	複弁蓮華文軒丸瓦	S K 1			
9	複弁蓮華文軒丸瓦	S K 1			
10	複弁蓮華文軒丸瓦	S X 3			
11	複弁蓮華文軒丸瓦	S X 1 上面	図版11-4	文3 図版12-3	
12	複弁蓮華文軒丸瓦				
13	蓮華文軒丸瓦				S K 13
14	単弁蓮華文軒丸瓦				S X 2
15	単弁蓮華文軒丸瓦				S X 2
16	複弁蓮華文軒丸瓦				S K 5
17	複弁八弁蓮華文軒丸瓦				S X 3 上面
18	複弁八弁蓮華文軒丸瓦				S X 3 上面
19	複弁八弁蓮華文軒丸瓦				D トレ 掘下げ
20	単弁蓮華文軒丸瓦				S X 3 上層
21	複弁五弁蓮華文軒丸瓦	S X 3 下層	図版11-7 図版11-3	文4 図版9-27 文4 図版9-27	
22	単弁蓮華文軒丸瓦				
23	単弁蓮華文軒丸瓦				S X 1 下層
24	複弁蓮華文軒丸瓦				C トレ 北掘下げ
25	単弁蓮華文軒丸瓦				S X 3 上層
26	単弁八弁蓮華文軒丸瓦				S X 2
27	単弁八弁蓮華文軒丸瓦				S X 2 最下層
28	二巴文軒丸瓦				S X 1 上面
29	二巴文軒丸瓦				S K 5
30	三巴文軒丸瓦				S X 2
31	三巴文軒丸瓦	S X 1 上層			
32	三巴文軒丸瓦				
33	三巴文軒丸瓦				S K 5
34	三巴文軒丸瓦				S X 1 上面
35	三巴文軒丸瓦				S X 3 上層
36	三巴文軒丸瓦				S K 5
37	三巴文軒丸瓦				S X 1
38	三巴文軒丸瓦				S X 2 最下層
39	三巴文軒丸瓦				S X 1 上層
40	三巴文軒丸瓦				S X 1 最下層
41	三巴文軒丸瓦	S X 2 下層			
42	三巴文軒丸瓦				
43	三巴文軒丸瓦				C トレ あげ土
44	三巴文軒丸瓦				S X 1 下層
45	三巴文軒丸瓦				S K 2
46	三巴文軒丸瓦				S X 1 下層
47	三巴文軒丸瓦				S X 1 下層

48	三巴文軒丸瓦	S K 5		
49	三巴文軒丸瓦	S X 1 下層		
50	三巴文軒丸瓦	S X 2		
51	三巴文軒丸瓦	S X 2		
52	三巴文軒丸瓦	S X 1 最下層		
53	三巴文軒丸瓦	S X 1 下層		
54	三巴文軒丸瓦	S X 1		
55	三巴文軒丸瓦	S X 1 最下層		
56	三巴文軒丸瓦	C トレ あげ土		
57	三巴文軒丸瓦	C トレ あげ土		
58	三巴文軒丸瓦	S D 1		
59	三巴文軒丸瓦	S X 1 最下層		
60	三巴文軒丸瓦	S X 1	下層	
61	三巴文軒丸瓦	S X 2		
62	三巴文軒丸瓦	S X 2 下層		
63	三巴文軒丸瓦	S X 2		
64	三巴文軒丸瓦	S X 1 上面		
65	均整唐草文軒平瓦	S X 1 肩部		文 5 -66・268
66	均整唐草文軒平瓦	S X 3 上面	図21-2	
67	唐草軒平瓦	S X 3		
68	唐草軒平瓦	S X 3 東西断面		
69	均整唐草文軒平瓦	S K 13		文 4 図版12-41の逆文様か
70	偏行唐草文軒平瓦	S X 3	図版13-5	文 4 図版12-43
71	偏行唐草文軒平瓦	S X 3 下層	図版13-5	文 4 図版12-43
72	偏行唐草文軒平瓦	S X 3 下層	図版13-5	文 4 図版12-43
73	偏行唐草文軒平瓦	S X 3 池底	図版13-5	文 4 図版12-43
74	偏行唐草文軒平瓦	S X 3 東部	図版13-5	文 4 図版12-43
75	偏行唐草文軒平瓦	S X 1	図版13-5	文 4 図版12-43
76	偏行唐草文軒平瓦	S X 3	図版13-5	文 4 図版12-43
77	偏行唐草文軒平瓦	S K 5	図版13-5	文 4 図版12-43
78	唐草文軒平瓦	S X 3 上面		
79	唐草文軒平瓦	S X 3		
80	唐草文軒平瓦	S X 3 最下層		
81	唐草文軒平瓦	S X 1 上面		文 6 図13-2
82	唐草文軒平瓦	S X 3 東部		
83	偏行唐草文軒平瓦	S X 3 最下層		
84	偏行唐草文軒平瓦	S X 3 最下層		文 6 P-44-18-1、文 7 図版35-20、文 8 図版49-H T 22
85	偏行唐草文軒平瓦	S X 3 上面		文 6 P-44-18-1、文 7 図版35-20、文 8 図版49-H T 22
86	偏行唐草文軒平瓦	S X 1 下層		文 6 P-44-18-1、文 7 図版35-20、文 8 図版49-H T 22
87	偏行唐草文軒平瓦	S X 3 最下層	図版13-3	文 7 図版35-22、文 8 図版49-H T 23、文 9 図版145-X 5-100、文15図版22-628
88	偏行唐草文軒平瓦	S X 1 下層	図版13-3	文 7 図版35-22、文 8 図版49-H T 23、文 9 図版145-X 5-100、文15図版22-628
89	唐草文軒平瓦	S X 3 下層		
90	唐草文軒平瓦	A トレ あげ土		
91	唐草文軒平瓦	S K 13		文 9 図版145-X 5-102

92	唐草文軒平瓦	S X 1 最下層		
93	唐草文軒平瓦	S X 1 上面		
94	唐草文軒平瓦	S X 1 上面	図版13—8	
95	唐草文軒平瓦	A トレ 第2層		
96	唐草文軒平瓦	S X 1 最下層	図版13—9	文9 図版145—108
97	半裁花文軒平瓦	S X 1 最下層	図版13—10	文10—O、文13 図版12—19
98	半裁花文軒平瓦	S K 12	図版13—10	文10—O、文13 図版12—19
99	唐草文軒平瓦	S X 1 最下層		
100	唐草文軒平瓦	S X 1 下層		
101	唐草文軒平瓦	S X 2 下層		
102	唐草文軒平瓦	S X 1 下層		
103	唐草文軒平瓦	S X 2 断面		
104	唐草文軒平瓦	S X 1 上層		
105	唐草文軒平瓦	S D 1		
106	宝相花文軒平瓦	S X 1 最下層		文10—J、文11 図版5、文12 図—9 WN27— a·b、文13 図版9—20
107	幾何学文軒平瓦	S D 1 上層	図版15—67	
108	雁金文巴文軒平瓦	S X 2 下層	図版13—11	文10—E
109	雁金文巴文軒平瓦	S D 1	図版13—11	文10—E
110	雁金文巴文軒平瓦	S X 2 最下層	図版13—11	文10—E
111	雁金文巴文軒平瓦	S X 1 上面		
112	雁金文巴文軒平瓦	S D 1		文14 図版11—4
113	三巴文軒平瓦	S X 1 最下層		
114	蓮華文軒平瓦	S D 1		
115	蓮華文軒平瓦	S X 2		
116	蓮華文軒平瓦	S X 1 下層		
117	剣頭文軒平瓦	S D 1		
118	剣頭文軒平瓦	S X 1 上面		
119	剣頭文軒平瓦	S X 2 下層		
120	剣頭文軒平瓦	S X 1 下層		
121	剣頭文軒平瓦	C トレ あげ土		
122	剣頭文軒平瓦	S X 2 北区		
123	剣頭文軒平瓦	S X 1 下層		
124	剣頭文軒平瓦	S X 2 下層		
125	剣頭文軒平瓦	S X 1 最下層		
126	剣頭文軒平瓦	S X 1 最下層		
127	剣頭文軒平瓦	S X 1 上面		
128	剣頭文軒平瓦	S X 2 最下層		
129	剣頭文軒平瓦	S X 1 下層		
130	剣頭文軒平瓦	S X 1 上面		
131	剣頭文軒平瓦	S X 2 最下層		
132	剣頭文軒平瓦	S K 5		
133	剣頭文軒平瓦	S X 2 下層		
134	剣頭文軒平瓦	S X 1 下層		
135	剣頭文軒平瓦	S X 1 下層		
136	剣頭文軒平瓦	S X 2		
137	剣頭文軒平瓦	S X 1 上層		
138	剣頭文軒平瓦	S X 3 上層		
139	剣頭文軒平瓦	S K 9	図版15—60	
140	剣頭文軒平瓦	S X 2 上面		

141	剣頭文軒平瓦	S X 1 最下層		
142	剣頭文軒平瓦	S X 2 最下層		
143	剣頭文軒平瓦	S X 1 下層		
144	剣頭文軒平瓦	S X 1 上層		
145	剣頭文軒平瓦	S X 1 上層		
146	剣頭文軒平瓦	S X 2		
147	剣頭文軒平瓦	S X 2 上面		
148	剣頭文軒平瓦	S X 2 上面		
149	剣頭文軒平瓦	S X 1 下層		
150	剣頭文軒平瓦	S D 1		
151	剣頭文軒平瓦	S X 1 下層		
152	剣頭文軒平瓦	S X 2		
153	剣頭文軒平瓦	S X 1 下層		
154	剣頭文軒平瓦	S X 2 最下層		
155	剣頭文軒平瓦	S K 5		
156	剣頭文軒平瓦	S X 2		
157	剣頭文軒平瓦	S K 2		
158	剣頭文軒平瓦	S X 1 下層		
159	剣頭文軒平瓦	S X 1		
160	剣頭文軒平瓦	S X 2		
161	剣頭文軒平瓦	S K 5		
162	剣頭文軒平瓦	S X 1 最下層		
163	剣頭文軒平瓦	S X 1 下層		
164	剣頭文軒平瓦	S X 1 下層		
165	剣頭文軒平瓦	S X 2 上面		
166	剣頭文軒平瓦	S X 2 下層		
167	剣頭文軒平瓦	S D 1		
168	剣頭文軒平瓦	S K 5		
169	剣頭文軒平瓦	S X 3 上層		
170	剣頭文軒平瓦	S D 1		
171	剣頭文軒平瓦	S X 2 下層		
172	剣頭文軒平瓦	S X 1 最下層		
173	剣頭文軒平瓦	S X 1 上層		
174	剣頭文軒平瓦	S X 1 最下層		
175	剣頭文軒平瓦	S X 1 最下層		
176	巴文軒丸瓦	S D 1		
177	剣頭文軒平瓦	S D 1		
178	唐草文軒平瓦	S X 3 上面		
179	平瓦	S X 1 下層		
180	平瓦	S X 3		
181	平瓦	S X 3 最下層		
182	平瓦	S X 3 最下層		

(他の遺跡同范同文関係の文献—〇〇の数字、記号は、参考文献内の個有番号を示している。)

## 文献一覧

- 文1 『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
- 文2 『平安京古瓦図録』平安博物館 1977年
- 文3 『法勝寺跡発掘調査概報昭和61年度』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 文4 「高陽院跡」『平安京跡発掘調査概報昭和56年度』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982年
- 文5 『坂東善平収蔵品目録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980年
- 文6 「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う法勝寺跡発掘調査」『京都市埋蔵文化財年次報告1974—II』六勝寺研究会 1975年
- 文7 『京都大学埋蔵文化財調査報告II—白河北殿北辺の調査』京都大学埋蔵文化財研究センター 1981年
- 文8 「病院内遺跡」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和51年度』京都大学構内遺跡調査会 1977年
- 文9 「X—5」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報III』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982年
- 文10 『栢杜遺跡調査概要』鳥羽離宮跡調査研究所 1975年
- 文11 『尊勝寺跡発掘調査概報』六勝寺研究会 1973年
- 文12 『一六勝寺跡—六盛西店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』六勝寺研究会 1976年
- 文13 「第136次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報』平成2年度 京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 文14 「第59次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概要 昭和55年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年
- 文15 『平安京右京六条一坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1990年

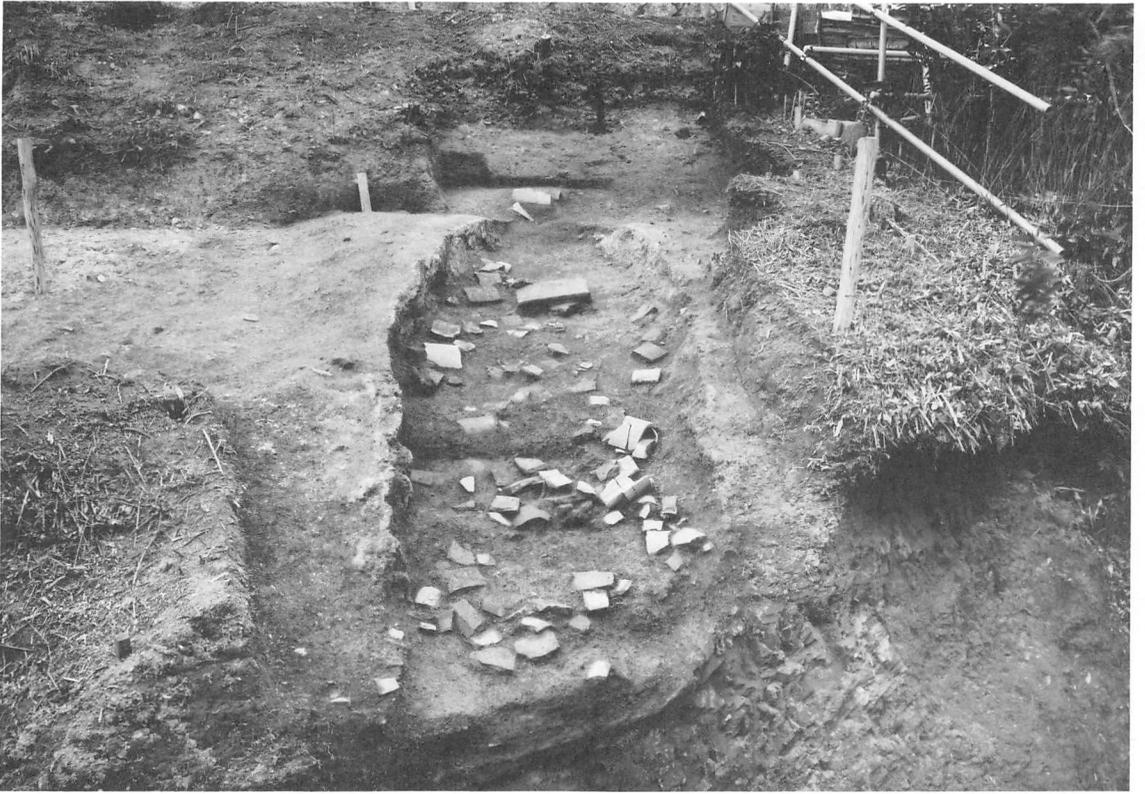
# 版 图



1 調査前全景（北西から）



2 調査区全景（南西から）



1 21号窯第2次作業面（南から）



2 21号窯第1次作業面（南から）



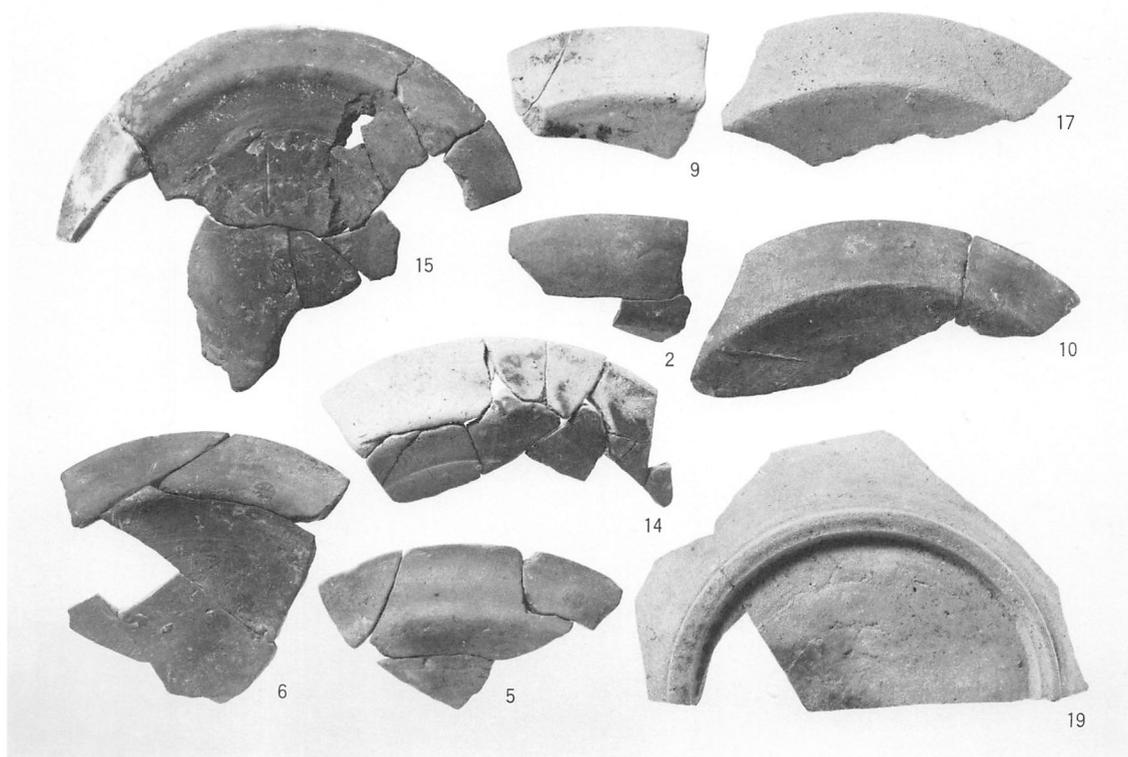
1 22・23号窯, 土壙1 (南から)



2 24号窯 (北から)



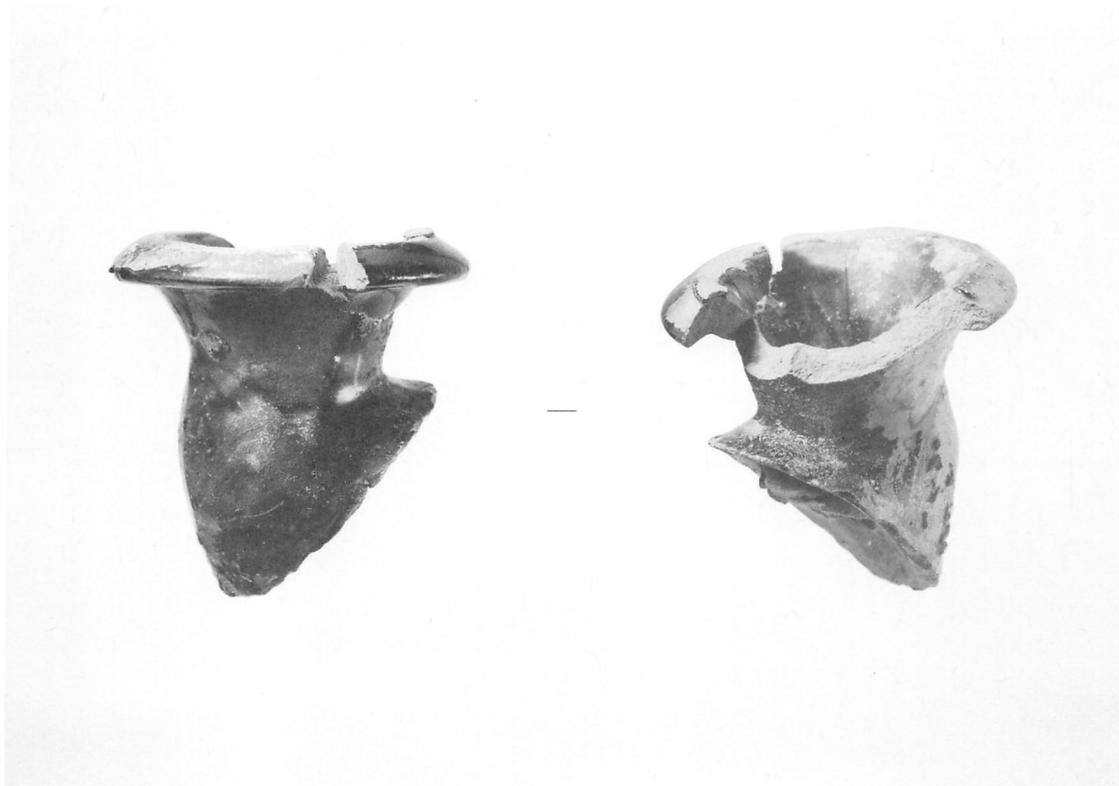
1 21号窯出土須恵器



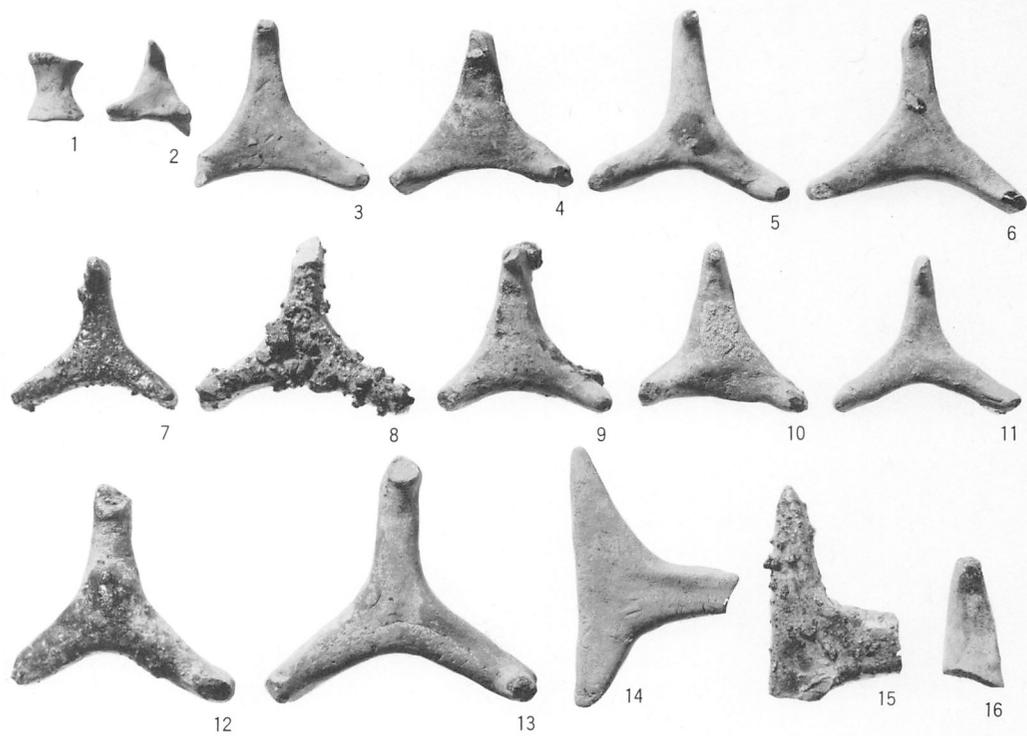
2 21・22号窯出土須恵器



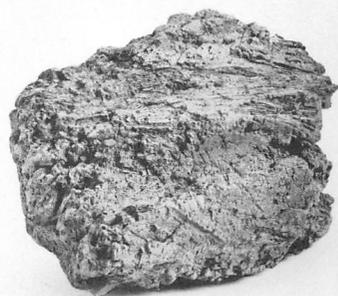
1 21~23号窯出土須恵器，施釉陶器



2 21号窯出土二彩釉陶器



1 21·22号窑出土窑道具



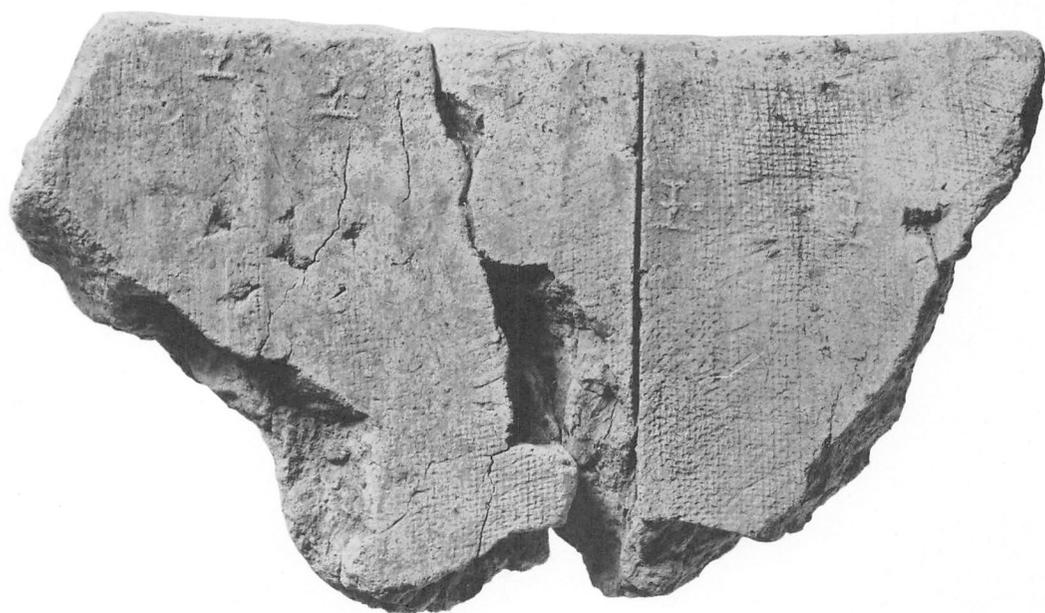
2 出土土器，軒瓦，窯体片



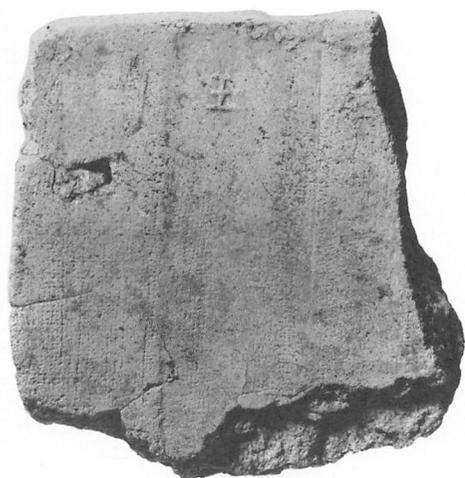
1 21号窯第1次操業面出土熨斗瓦



2 21号窯第2次操業面出土熨斗瓦



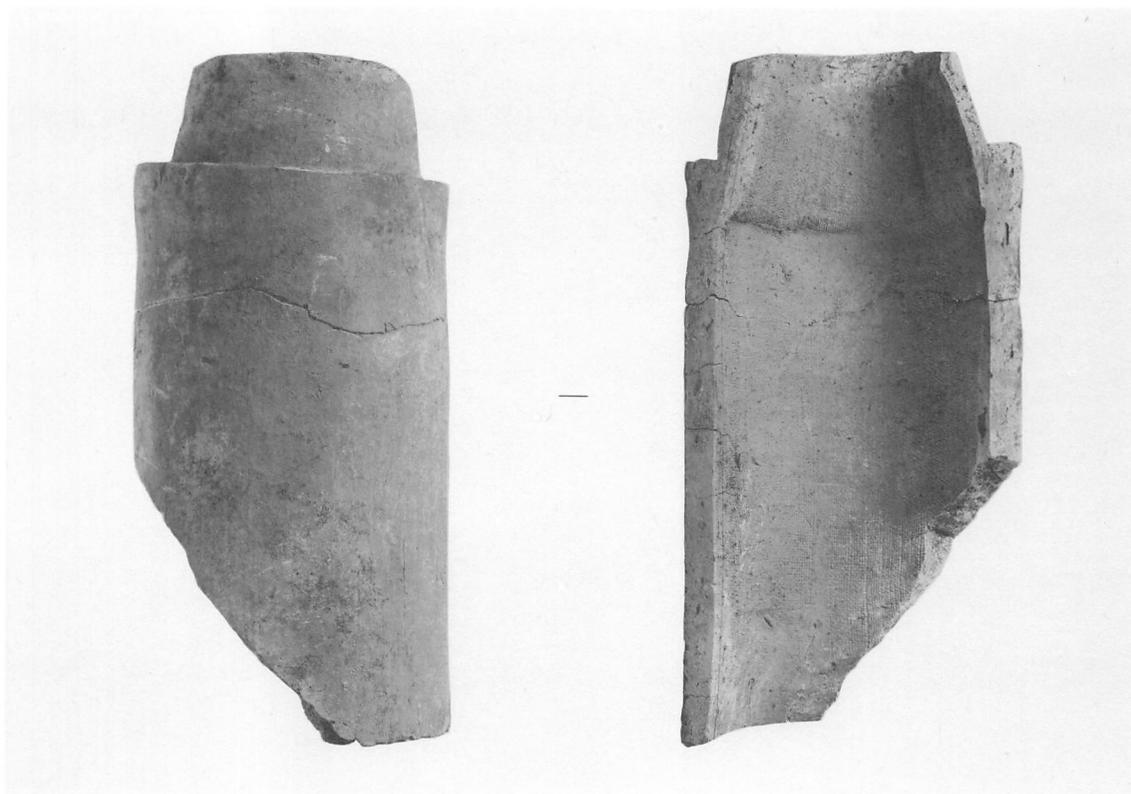
1 「玉」銘熨斗瓦



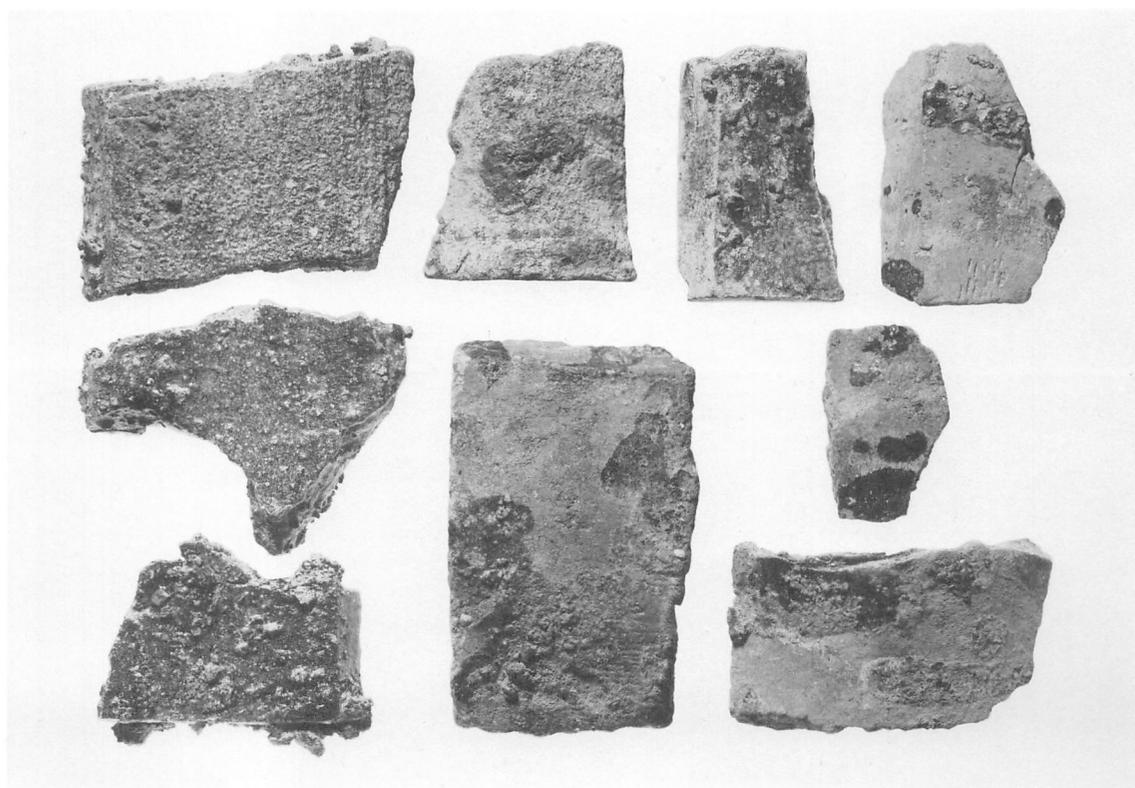
2 「玉」銘熨斗瓦



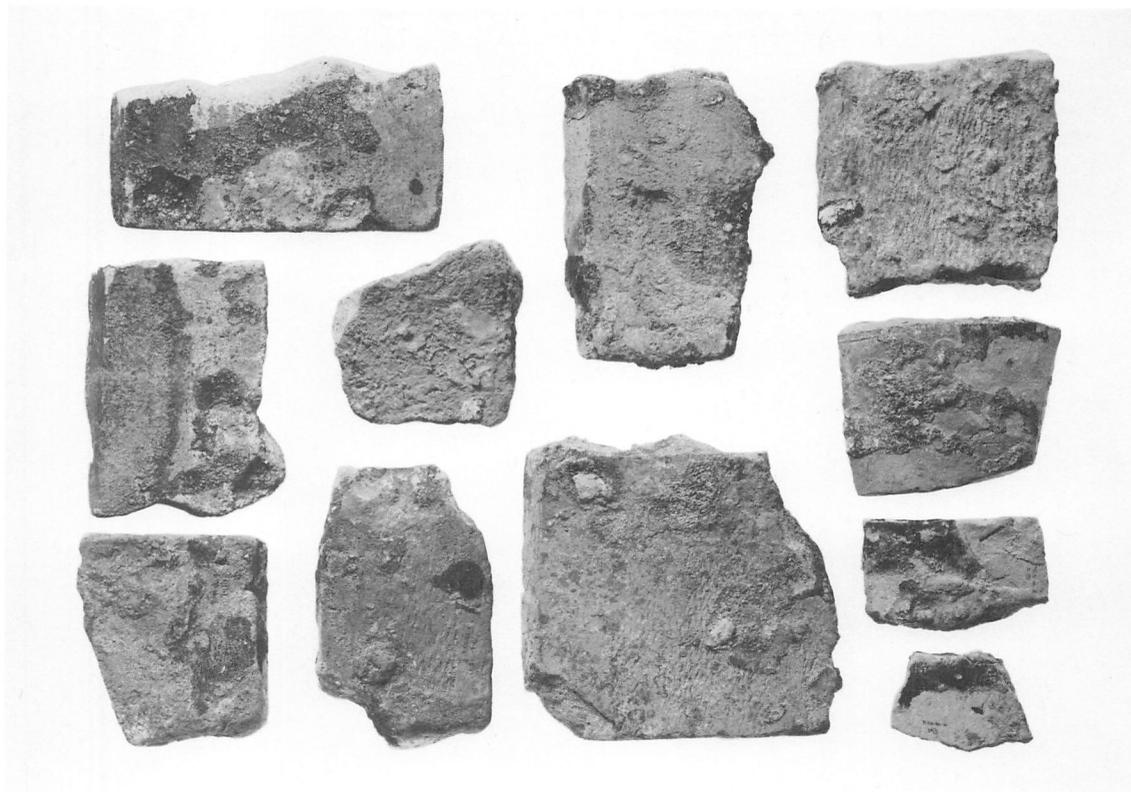
3 2の部分拡大



1 22号窯出土丸瓦



2 21号窯第1次操業面出土瓦(烧台)



1 21号窯第2次操業面出土瓦（烧台）



2 22号窯出土緑釉熨斗瓦（烧台）



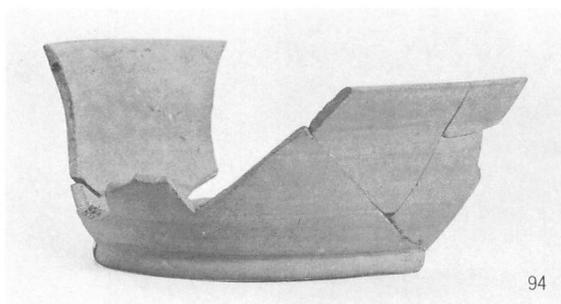
調査区全景（北から）



1 SX3路面（東から）



2 SX3路面完掘状況（東から）



須恵器・窯道具



緑釉陶器・須恵器各底部



49



48



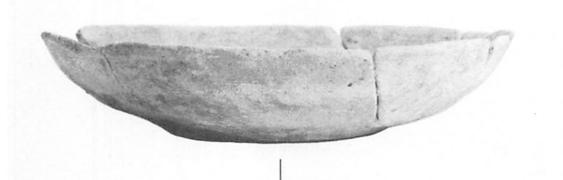
46



100



58



61



56



64



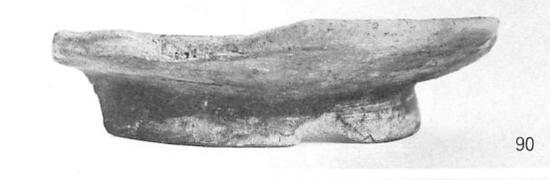
59



67



90



112



81

白色土器・白磁碗



1



65



7



图32



13



图30

軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦



16



17



18



14



21



23



27



26



43



45



44



61



52



54



53

軒丸瓦



104



87



94



112



115



111



106



117



98



154



107



155



95



156



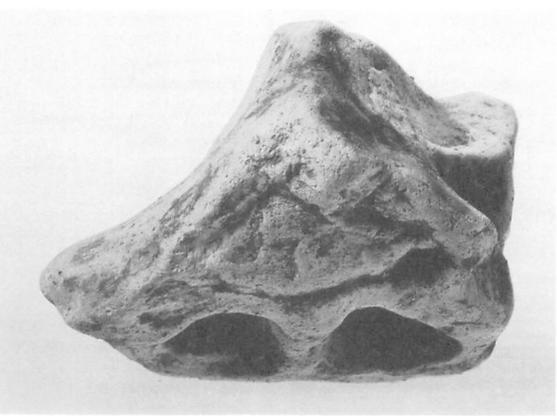
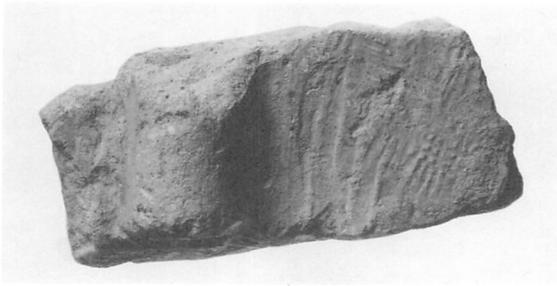
96



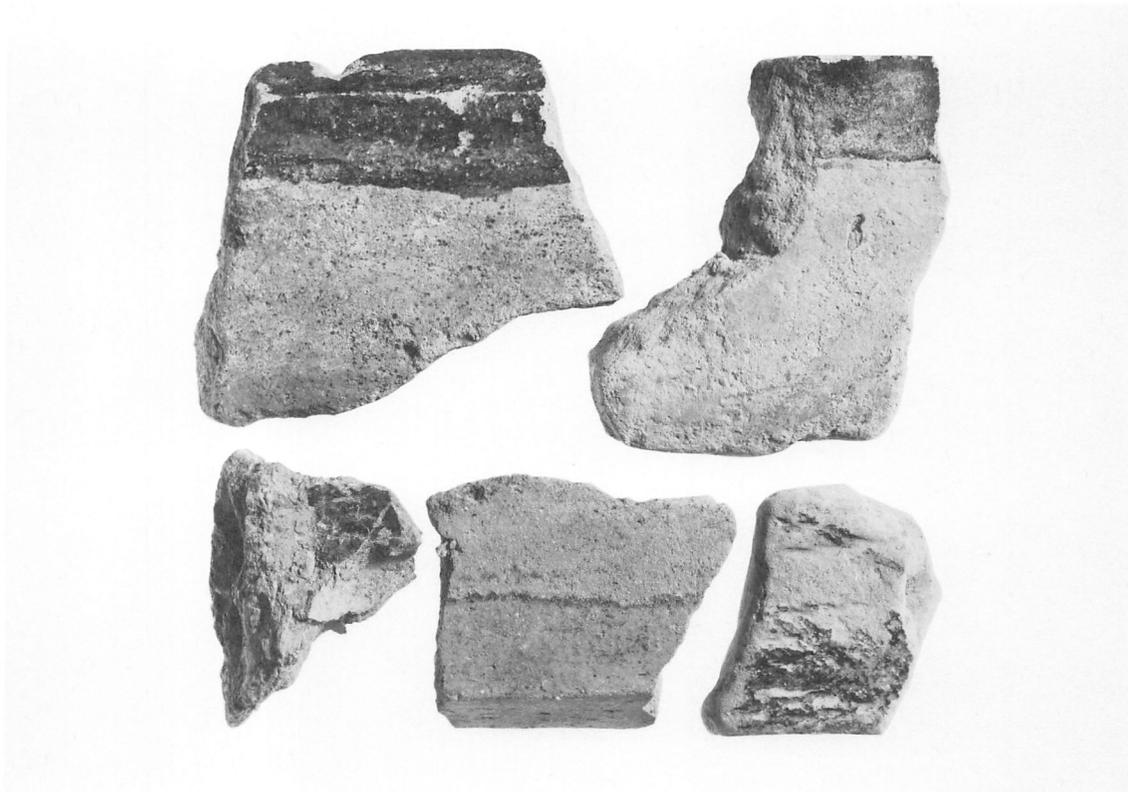
99



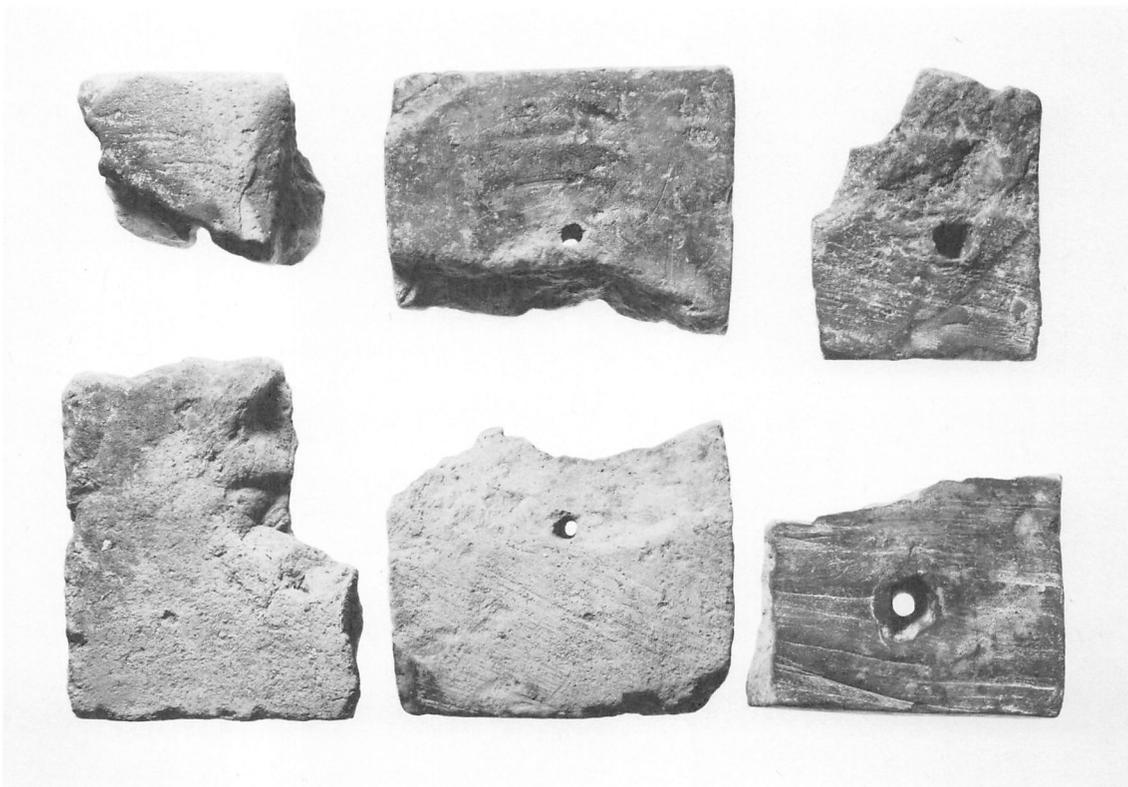
157



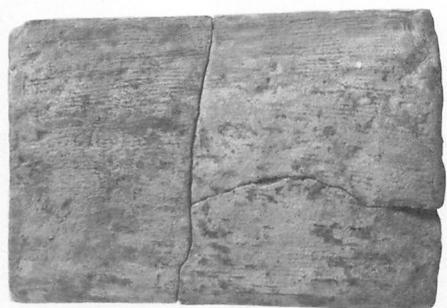
鴟尾・鬼瓦



1 緑釉熨斗瓦



2 磚



1 平瓦



2 丸瓦

# 栗栖野瓦窯跡発掘調査概報

平成4年度

発行日 平成5年3月31日  
発行 京都市文化観光局  
住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13 京都会館内  
編集 (財)京都市埋蔵文化財研究所  
住所 京都市上京区今出川大宮東入元伊佐町265-1  
TEL (075) 415-0521  
印刷 真陽社